

Tab.43 下田I~III式有稜高杯Aの各比率

		下田遺跡	池上遺跡	鶴田町遺跡	西大路遺跡	上町遺跡	府中遺跡	豊中遺跡	補正値	資料母数計
		母	2	1	14	3	6	5		
		口縁比:口稜比	口縁比	口縁比:口稜比	口縁比	口縁比:口稜比	口縁比	口縁比:口稜比	口縁比	口縁比:口稜比
I式	1	86.9	12.5	4						86.9 12.5 4
	2	86.2	14.0	9	88.5 13.0					86.6 13.8 11
	3	82.3	14.2	2						82.3 14.2 2
	4	68.6	24.0	1	72.0 23.0					70.3 23.5 2
II式	1	62.9	25.6	24		66.2 26.7				64.1 26.0 38
	古	63.7	26.1	7		60.8 28.2	57.8 30.2			60.9 28.0 16
	新	47.4	34.6	2				52.6 32.6	51.1 33.2 7	
III式		41.7	38.4	1					41.7 38.4 1	
		39.0	41.0	1					39.0 41.0 1	

資料のみを抽出した。こうして得られた資料群をもとに、前節第3項1に述べた手法で口縁比と口稜比を算出し、下田遺跡諸様相から作成した従来のデータを補正してTab.43、およびFig.455に示した。

追加資料によって補正し得たのは、I-2・4式、II-1・2式の各小様式である。I-2式では、池上曾根遺跡の追加資料が下田遺跡様相2の分布域内に収まる。平均値をとると、I-1式とI-2式の間の口縁比が接近し、また口縁比は後者が高くなっている。これはI-2式の有稜高杯Aが、その前小様式と比べて口径・稜径の変化が少なく、むしろ口縁部が延びて立ち上がりが急角度になる傾向にあることを示す。I-4式では、鶴田町遺跡の資料が様相4の資料と酷似した形態をとる。I-4式は数值的にはII-1式に接近しているが、特に口縁比において古相をとどめる。II-1~II-2式は、西大路・上町・府中・豊中各遺跡における比較的豊富な資料群の投入によって、下田遺跡単体の様相に依拠するより、さらに明瞭な分布域を把握できるようになった。II-1式からII-2式新相に至るまで、分布域を部分的に重ねながら口縁比の低下、口縁比の増加が実現されている。分布域の重なりは、この間の高杯部の法量が、比較的緩慢な変化であったことを示すようであるが、II-2式古相から新相への

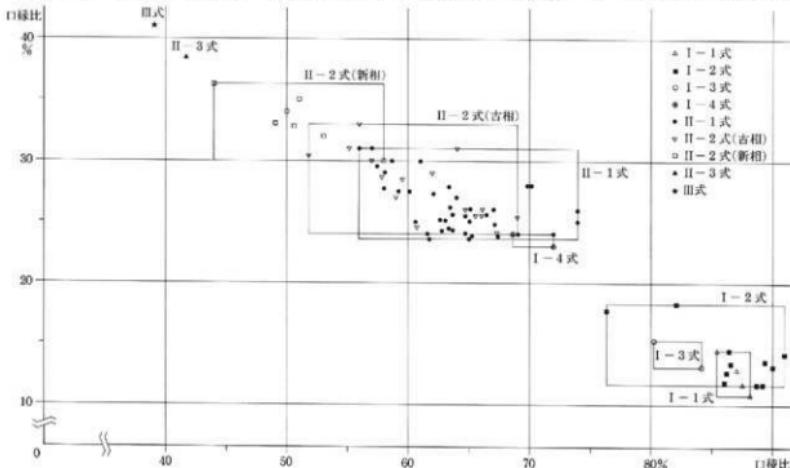


Fig. 455 下田I~III式有稜高杯Aの法量分布

変化は大きく、II-1式とII-2式新相の分布はほとんど重ならない。

以上のように他遺跡の資料を加えても、不可逆的に進行する口縁比の低下、および口縁比の増加という相関関係は損なわれず、むしろ補強される。諸遺跡資料の数値は、下田遺跡諸様相のそれと矛盾しないのである。高杯形態とそれが伴う全体の土器様相も、また然りである。従って、少なくとも有縁高杯Aの杯部形態は、遺跡の相違を超越して運動する型式学的原理に支配されていたと見なし得る。

第4節 下田Ⅲ式を巡って

第1項 織内における布留式土器編年研究の概略

弥生土器から庄内式併行期を経て連続する土器様相の変遷によって、下田Ⅲ式を和泉北部域における布留式の端緒として前節までに結論づけた。本節ではさらに下田Ⅲ式が、布留式の中で占める相対的位置関係について、より厳密な検討を行いたい。

下田遺跡では下田Ⅲ式を以て、弥生時代後期以来、連綿と継続してきた集落の足跡が途絶え、以降は散発的な遺構の形成や、僅かな遺物の出土を見るに過ぎない。従って下田遺跡単独の資料によって、その後の土器様相の変遷を辿る作業是不可能であり、再び先行研究に立ち帰る必要がある。

布留式土器の研究は、地域を超えた広範囲で類似した形態をとる小形丸底土器の認識(小林1934)に統き、「土師器の古い様式を代表するもの」として「布留式土器」が設定されるに至った(末永・小林・

Tab.44 布留式土器編年対照表

安達・木下編年 (1994) 基準資料 併行資料		坂田寺跡下層	上ノ井手遺跡SD031 藤原宮内裏東外郭SD012 新宮宮内裏東外郭SD014	上ノ井手遺跡SE030下層	上ノ井手遺跡SE030上層		
		平城宮朝倉殿下層調査	小若江北式				
新井編年(1979) 基準資料 (庄内式)	無文様式(新都) (庄内式)	古都	中相	新相			
		藤原道跡II地点 馬場川道跡T地点	小若江北式	船橋遺跡O-I地点			
坂田編年(1984) 基準資料 併行資料		第1期	第2期	第3期	(前半) 第4期 (後半)		
		馬場川T地点 重井道跡SD003・SD003	小若江北式	佐室遺跡SD6003	八尾南遺跡 SE20 SE21		
寺沢編年(1986) 基準資料(大和) 併行資料		坂田寺跡下層	上ノ井手調査	上ノ井手調査	上ノ井手調査		
布留Ⅰ様式			布留Ⅱ様式				
基準資料(大和) 併行資料(河内)	布留Ⅰ式	布留Ⅰ式	布留Ⅱ式	布留Ⅲ式	(右) 布留Ⅳ式 (左)		
	藤原道跡東北坂5 江土枝4下層・江土枝5・ 江土枝3	藤原道跡東北坂4上層 江土枝5下層・江土枝6・ 江土枝3	藤原道跡東北坂401下層 平城宮朝倉殿下層SD0000 佐室遺跡SD-301・舟 道9・藤原道跡II・RSK-II 舟道9・佐室遺跡SD-15下層 坂田寺跡SD012・914 坂田寺跡SD-031	上ノ井手遺跡SE030下層 大井遺跡土器I 佐室遺跡SD-50下層	上ノ井手遺跡SE030上層 佐室遺跡SD-50中層	発光遺跡SD-50上層 平城宮京庭三条・江下層 SD-861	
併行資料(河内)	成守寺遺跡SE-2 八尾南遺跡SE-13・SW -3・SK-16・SK-62 美濃道跡SE-01・BSK -304・C5X-303	愛宕遺跡SE-02・SK-03 八尾南遺跡SE-4・SE -9・SK74 川北遺跡土器 他	小若江北式 美濃道跡SE030・ C5X94 川北遺跡B	佐室遺跡SD6003・6009・ 6010 (船橋遺跡O-I)	八尾南遺跡SE-21・26	船橋遺跡O-II 八尾南遺跡SE-1・2・ 3・16・SK-2・28	
	坂田寺跡下層 船橋遺跡SC001						
木田編年(1991) 基準資料	庄内式新相	布留式古相		布留式新相		布留式以降	
		庄内式Ⅴ-布留式Ⅰ	布留式Ⅱ	布留式Ⅲ	布留式Ⅳ	布留式Ⅴ	
		坂田寺跡下層 船橋遺跡SC001	上ノ井手SD031 小若江北遺跡	藤原宮内裏東外郭SD012 上層 八尾南遺跡SE031 大井遺跡堅穴住居 大井遺跡SK251	平城宮朝倉殿下層SD003 上層 八尾南遺跡SE031 大井遺跡堅穴住居 大井遺跡SK251	和泉森本遺跡SD003 平城宮下層SD2881 八尾南遺跡SE-5 小阪各遺跡SK14	

中村1938)。さらに布留式の「最も純粹な形」として小若江北遺跡出土土器が紹介され(坪井1956), また畿内第V様式と布留式の間隙を埋める「庄内式」の提唱(田中1965)を経て, 編年上のおよその枠組みが固められた。こうして用意された枠組みは, 上田町遺跡(原口1968), 北鳥池遺跡(大阪府立花園高校地歴部編1970)などの先駆的調査によって, 基礎部分が次々と肉付けされて行った。さらに今日では膨大な量の資料が蓄積されるに及んでおり, 畿内での布留式土器の編年的研究は, 大和・河内など資料に恵まれた地域で精力的に行われている。

主だった編年的研究と, それぞれの基準資料は, 領域を避けてTab.44にまとめて対比した。安達厚三・木下正史は飛鳥地方の出土資料をもとに, 布留式土器について4段階に細分した変遷の見通しを述べた(安達・木下1974)。都出比呂志は布留式土器を3期に細分して, 前期古墳の分期との対応関係を推察した(都出1979)。阪田育功は河内の布留式土器の様相を概観し, 東大阪市・八尾市にまたがる佐堂遺跡出土の土器の編年の位置づけを試みた(阪田1984)。寺沢薰は時に辛口の批判を交えつつ古式土師器の学史を整理した上で大和の布留式土器を5分割し, 各地の併行資料にも言及している(寺沢1986)。米田敏幸は庄内式～布留式に至る古式土師器の変遷を, 布留系・布留式甕を指標として9段階に分割し概観しており, 布留式期については5分割を行っている(米田1991)。

上記各編年案を対比させると, 各研究者間で布留式を3～5分割する細分がなされているが, 寺沢が布留式の初現において布留0式以外は, 標識に掲げられた基準資料をみれば, 細部の差はあれ概ね安達・木下以来, 共通する編年観に基づき構築されていることがわかる。そのうちほぼ共通する基準資料は, 布留式を4分割した場合の前半前葉が坂田寺下層・平城宮朝集殿下層S D6030下層, 前半後葉が小若江北式・上ノ井手遺跡S D031, 後半前葉が上ノ井手遺跡S E030下層・佐堂遺跡S D6003, 後半後葉が上ノ井手遺跡S E030上層・八尾南遺跡S E21である。なお, 安達・木下・阪田が須恵器出現以前に布留式の範囲を限るのに対し, 寺沢は布留4式新相としてT K216まで, 米田は布留式期VとしてT K208まで初期須恵器の共伴を認める点において, 前者より編年の時間幅が広くなっている。

第2項 布留式における下田Ⅲ式の相対的位置

1. 下田Ⅲ式最古相資料

前節で明らかにした下田Ⅲ式の内容は, S D1108(3層)を基準として導かれている。本資料の土器相は出土の状況, および量的所見から, やや広い時間帯の中で形成された可能性があるが, その様相は同時的として, あえて新旧に分離しなかった。本様式の中で同一器種が型式学的に分離できる場合, これを縦に並べて組列関係として捉える選択肢も生じる。しかし, これらを同じ様式の中で捉えたのは, ある時間幅の中において, 型式差を超えた共存関係を想定するからである。従って, 本様式でもその時間幅の中で, 小形器台B₂～B₄・C, 小形丸底土器A・Ba～Be・Cの共存を認めている。しかしこれも, さらに微視的に時間幅を狭めていけば, さらに細分される可能性も皆無ではない。例えば小形丸底土器AとBの共存する段階, Aが消滅してBが存続しつつ発展する段階, さらにBに加えてCが出現する段階を想定することは, 理論的には可能である。しかし純粹に近い組成を知る術は, 短時間に形成された一括資料から検証を重ねていく以外にない。ある器種について型式学的所見から組列関係を構築できたとしても, 他の器種との組合せの情報が欠落するからである。そして, この観点に立てば, S D1108出土土器は細分に適した資料と認め難い。

このようなS D1108資料のもつ限界に対し, 下田遺跡の土器窓SW1365資料は, 下田Ⅲ式の範疇で最

も古く、かつ純粹に近い様相を示すものとみてよい。SW1365の組成は、直口壺A、布留式祖形甕B・D、庄内式甕B、有稜高杯C、楕形高杯B₂、低脚高杯、小形器台B₂・B₃・X、小形丸底土器B_a、製塩土器Dである。量的には僅少であるが、II式とIII式の過渡的な土器相を反映する資料が、随所にみられる点で看過できない。しかし、過渡的な様相をもつても関わらず、これらをII-3式に含めずIII式としたのは、全体的な土器相が弥生の系譜から逸脱しているからに他ならない。また布留式祖形甕D、低脚高杯、小形丸底土器B_a、製塩土器DはII式の組成に含まれず、III式での出現と目される点も、この考え方を補強する。さらに本資料をIII式の中で最古相に位置づけたのは、有稜高杯C、小形丸底土器B_aが、SD1108資料と比べ、型式学的に先行する特徴を備えているからである。小形器台B₂が組成に含まれない点も、傍証になり得るかも知れない。III式で初めて出現する器種で、本資料の組成から欠落するものは、複合口縁壺C、布留式甕、布留系高杯、有段口縁鉢、小形器台Cなどである。これらがIII式最古相の段階の組成に含まれたか否かは、資料の制約から明らかにできない。

2. 下田Ⅲ式併行資料

下田Ⅲ式と同一の様相を呈する良好な一括資料として、中河内地域の壹振遺跡SE03出土資料を掲げる(大野1983)。本資料によって、和泉と河内、両地域における布留式の併行関係に共通の定点が与えられる。SE03は素掘りの井戸で、内部から古式土師器が一括投棄された状態で出土した。出土土器の器種は、直口壺A・B、複合口縁壺C、庄内式甕A・B、布留式祖形甕C・F、布留式甕、有段口縁鉢、小形器台B、小形丸底土器B、製塩土器Dである。高杯を欠いており、また下田Ⅲ式とは地域偏差の認められる器種もあるが、本様式の組成における主要部分はよく一致している。

直口壺にはA・Bがあり、Aの口縁部は大きく外反するが、Bは直線的に延びている。複合口縁壺Cは、ミガキBで仕上げられた小形のCaである。壺には他に広口壺、複合口縁壺Xなどがある。

甕の組成中には弥生形甕を含まない。庄内式甕にはA・Bの二者があり、それぞれの組成比は7:2である。口縁部はk・m・n形態があり、n形態が主体をなす。布留式祖形甕はC・Fが認められ、口縁部形態は前者がj・n、後者がrを呈する。布留式甕の口縁部形態はn・o・q・rである。庄内式甕、布留式祖形甕、布留式甕の組成比率は、およそ2:1:2で、布留式祖形甕が主体的な下田Ⅲ式の状況とは異なる。他に吉備系の龜川上層式に属する甕などが出土している。

有段口縁鉢は、口縁部における有段部の屈曲が比較的弱い。体部内外面の調整はミガキBによる。

小形器台Bは受部の口縁端部が垂直に短く立ち上がるB₂である。調整は不明。

小形丸底土器Bは形態を細分するとBbに相当する。外面にミガキBを用いた精製品である。

製塩土器Dの底部は丸底、あるいは尖底気味の丸底をもつものと、小さく突出しない平底を備えたものがある。最終調整をそれぞれタタキ、ナデ、ハケに委ねた三者がある。

SE03は計画的に埋められたと考えられ、また出土土器に打ち欠きを有するものが多いことから、その投棄に際しては意図的な器種選択が行われた可能性がある。従って、本資料には器種や組成比に偏差の生じる余地があり、特に組成比について普遍化を図るのは躊躇される。しかしながら、器種の一部における欠落を考慮してもなお、本資料では布留式の基本組成が達成されている。また庄内式甕、布留式祖形甕、布留式甕の三者が共存し、後二者の口縁部形態がrを含みながら、なおも型式学的に先行するn形態などが主体的な状況にあるのは、下田Ⅲ式と共通した様相である。有段口縁鉢の存在や、小形器台、小形丸底土器の形態も、III式のものと顔面を生じない。本資料について調査者である大野薫は、その編年上の位置について「布留式の甕や、小型三種がすでに出現」していることから、基本的には布留

式に属するものとした。またさらに踏み込んで「定型化した布留式だけで構成される小若江北式の段階よりは古く」、庄内系の壺や過渡的形態の壺C(布留式祖形壺)が払拭しきれていないことを重視して、「布留式の最古の段階の土器」と的確に指摘している。

なお、萱振遺跡S K03の土器も、SE03と同時期の併行資料として用いられる機会が多い。しかし、この遺構自体は中世に形成されたもので、性格的にはむしろ包含層に近いことから、その一括性の認定にあたっては慎重を期すべき資料であることを付記しておく。

3. 下田Ⅲ式後続資料

下田Ⅲ式に後続する土器資料について、基本的には下田遺跡の所在する和泉地域を中心として組列関係を追究すべきではある。しかし、本地域での布留式前半期の遺跡には四ッ池遺跡・七ノ坪遺跡などがあるが、資料の量的制約などの理由から、積極的に一括性を評価できる良好な土器資料の抽出は、現状では困難と言わざるを得ない。従って、比較的良好な資料の得られている近隣地域の土器様相との比較から、布留式、特にその前半期における下田Ⅲ式の相対的位置づけを試みる。比較資料として選択したのは、大和の平城宮跡第二次朝堂院東朝集殿下層SD6030下層土器群と、河内の小若江北式である。こうした比較の方法は、厳密な視座からみれば地域偏差が混入する可能性を否定できない。しかしこの問題は、まず前提として布留式のもつ「齊一性」に一定の信頼を置いた上で、広範囲の地域で同調しながら変化する布留式の器種と、地域色の強い器種とを分離することによって解決を図りたい。

a. 平城宮跡第二次朝堂院東朝集殿下層SD6030下層資料

下田Ⅲ式の直近に後続する資料として、平城宮跡第二次朝堂院東朝集殿下層SD6030下層出土土器群(以下、平城宮下層SD)を掲げる。本資料群は、安達厚三によって「広義の布留式に含まれ」、船橋遺跡K-I地点下層・小若江北遺跡・岡山県笠岡市高島遺跡(王泊第5層)出土土器と類似する点から、相互に「時間的に近い時期」ながらも「小若江北遺跡の土器よりも古い要素をもっている」と紹介された(安達1969)。このような所見をもとに安達・木下は布留式を4細分した場合、最初の段階の標識として坂田寺跡下層資料を提示し、類例として平城宮朝集殿下層溝、すなわちSD6030の資料を挙げた(安達・木下1974)。平城宮下層SD土器については、さらに井上和人が分析を行い、小型丸底壺を東大寺山古墳石製小型丸底壺と比較して形態上の類似点を指摘している。また当該資料を、坂田寺下層遺跡・纏向遺跡辻土坑4上層と時間的に併行する段階とし「大和地方にあっては、大規模な前方後円墳が築造されるようになる時期に作られ、使用されたものであり、従来「布留式土器」と称されている土器様式の中でも古い様相を示すもの」と結論づけた(井上1980)。

当該資料の主要な器種には壺、甕、高杯、小形丸底土器、小形器台、有段口縁鉢などがあり、出土土器点数にも恵まれていることから、土器組成を知る上でも重要である(須藤・吉田・土肥・井上1980)。すべて土器で構成され、須恵器を含まない。

壺の主体は直口壺で、壺組成のおよそ半数をこの器種が占めている。大形の直口壺Aと小形の直口壺Bが認められ、それぞれ同量が出土している。直口壺Bには平底を備えたものがある。直口壺の口縁部はヨコナデを主体とするが、先行調整として縦方向ハケが観察される個体がある。内面にはケズリを加えるものが散見される。複合口縁壺Cは壺組成中でも比較的多く、口径約13cmの小形品と、口径約20cm以上の大形品がある。形態的特徴として頸部が強く外傾した個体が多い。壺には他に小形壺、壺X、複合口縁壺Xなどがある。小形壺は出土個体数の上でまとまった存在であるが、下田Ⅲ式土器群にはみられず、対応関係をもたない。複合口縁壺Xは瀬戸内東部沿岸地域の外来系土器である。

甕では丸底の球形体部に、外傾もしくはやや内湾する口縁部を備えた布留式甕が主体である。口縁部形態は $j \cdot p \cdot q \cdot r$ が認められるが、 r 形態が多数を占め、またその端面形成も明瞭である。体部外面の調整は縦・斜方向ハケの後、上半部や肩部に丁寧な横向ハケを施した個体が多く、内面はケズリによって薄い器壁に仕上げられる。これらのうち内傾する端面をもつ甕は、布留式甕の中でも典型的な形態と認められる「く」の字に外反する口縁部と球形の体部を備えたハケ・ナデ調整の甕が、組成中に多くはないが認められる。布留式粗形甕と関連をもつ可能性を考えられる甕もあるが、詳細はよく分からぬ。また河内型の庄内式甕 A が出土しているが、甕組成中の極微量を占めるに過ぎず、この系譜がほぼ消滅していることを窺わせる。口縁部は p 形態をとっており、庄内式甕の系譜としては型式学的に新しい特徴を備える。その他の甕はおよそ外來系土器で、山陰系の複合口縁甕、東海系の S 字状口縁台付甕などの存在が認められる。

高杯の主体をなすのは有稜高杯 C で、胎土精良の精製品である。外面、杯部内面の最終調整はミガキ B による。布留系高杯は組成中に占める割合が小さい。他に東海系の高杯などがあるが、下田Ⅲ式との比較に適した資料はない。また腕形高杯は組成に含まれない。

鉢には有段口縁鉢、小形鉢、把手付鉢がある。鉢組成の中では有段口縁鉢が主要部分を占める。有段口縁鉢の口縁部における有段部の屈曲には、個体によって強弱の差がある。法量の上では、口径の偏差は最大でも 2 cm 前後と比較的安定している。体部外面はケズリで形成され、内外面ともミガキ B による最終調整を受ける。内面にミガキ C をもつ個体は、胎土が他と異なる 1 点に限られている。小形鉢には A₃・H があるが、組成の中で極めて低い位置にある。把手付鉢は 1 点のみで、下田Ⅲ式の組成には認められないものである。

小形器台は B・C の二者のみで構成されている。いずれも精製品である。小形器台 B は口縁部が短く直立し、端部がやや外反することから、小形器台 B₄ に類するが、型式的にはさらに後出のものとして捉えられる。最終調整は外面と受部内面にミガキ A を加え、受部内面にはそれに重ねてミガキ C を施す。小形器台 C は外面と受部内面に緻密なミガキ B を施すが、内面にミガキ C はみられない。

小形丸底土器の組成中では、口縁部が発達した典型的な「小型丸底甕」形態をもつ小形丸底土器 C が大部分を占めている。他の小形丸底土器は、これとは異質な特徴を備えているので比較対象にはならない。小形丸底土器 C の基本的な調整は、まず口縁部外面下半から底部にかけてケズリを行い、口縁部内外面にハケのちヨコナデ・ナデを加え、最終調整に緻密なミガキ B を施す。半数の個体では口縁部内面にミガキ C をもち精製された胎土を有する。

他に、平城宮の報告書では甕として記載されているが、下田遺跡分類にいう製塙土器 D が極めて低率で出土している。底部は先端が丸い尖底で、体部外面にタタキ成形痕がよく残されている。また本資料中では、製塙土器 C は全く組成に含まれない。

上記の土器以外に蓋が 1 点出土しているが、下田Ⅲ式では確認されていない。

b. 小若江北式

S D6030 下層に後続する資料として小若江北式を掲げる。末永らによって「布留式土器」の用語が設定された後、なおも布留式の範疇は茫洋としていた。この問題を解決すべく、坪井清足は布留式の「最も純粹な形」として小若江北遺跡資料を掲げ、布留式土器の概念に一定の尺度を与えた(坪井 1956)。爾来、この資料は近畿を中心とした西日本の古式土器研究に多大な影響を及ぼし、示準資料として学史的に重みをもつに至る。またこれらの土器の一部は公開展観に際し、村川行弘によって再調査の上

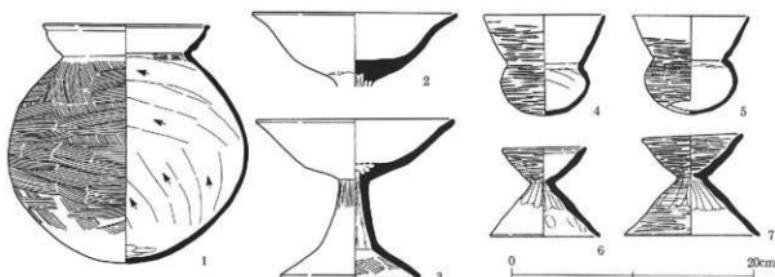


Fig. 456 小若江北遺跡出土土器実測図

で啓蒙されている(村川1958)。さらに横山浩一は、小若江北遺跡資料を須恵器の伴わない土師器として「小若江I式」、小若江南遺跡資料を須恵器出現後の土師器として「小若江II式」に分別呼称した(横山1959)。その後、小若江I式は「小若江北式」として術語の定着をみ、さらに現在では先にみたように布留式前半後葉としての位置づけがほぼ確定しており、その存在意義は学史的な位置に留まることなく、今なお損なわれていない。しかし、小若江北式の併行資料には上ノ井手遺跡S D031などがあるが、現状では良好な一括組成を示す資料に乏しい。

小若江北式の示準とされる土器群は、1940年に近畿大学の前身、大阪専門学校の校内整備工事中に池内から出土したが、その経緯などから厳密な意味での一括性には欠ける。本資料は小若江南遺跡出土土器と共に、近畿大学図書館で展示されている。本来の組成は直口壺、複合口縁壺、有稜高杯C、布留系高杯、布留式壺、小形丸底土器、小形器台C、有段口縁鉢などの器種から成立する。この度、本資料について再実測を行った。実見の上で図化し得た個体は布留式壺、布留系高杯、小形丸底土器、小形器台Cの4器種の一部に過ぎないが、これらの図化資料をFig.456に公開して観察所見を述べる。なお「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」の記載土器に比定される資料は、報告書番号としてこれを併記した。

1は報告書番号[14]の布留式壺である。球形の体部に内湾する口縁部を備える。最大径は体部のはば中央にある。体部外面は底部を除き、縦方向ハケ調整の後に横方向の断続的なハケを加えている。横方向のハケは部分的なので、先行調整の縦方向ハケがよく観察できる。ハケの条線は8本/cm。底部は丸底で平滑であるが、部分的に一方向の弱いハケ調整が残る。体部内面は底部に指頭圧痕が残り、下半部を左上がり縦方向、上半部を左上がり横方向にケズリを加える。ケズリの最上部は頸部内面まで及ばずその僅か下方で止まり、ケズリ残された部分には横方向ハケが観察される。口縁部は端部と頸部に強いヨコナデが施され、内湾の傾向がよく表れている。口縁端部はやや内側に拡張され、水平な端面形成を行う。口縁部形態q。色調は外面が灰黄褐色(10Y R6/2)～黒色(5Y 2/1)、内面が灰黄褐色(10Y R4/2)～黒色(5Y 2/1)である。口径13.7cm、器高20.4cm、器径19.8cm。

2は脚部を欠損した布留系高杯で、報告書には記載がない。全体的に磨耗しているが、ヨコナデを主体とした調整と思われる。丸味を帯びた杯部の底から緩やかに外反する口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめている。脚柱部の付け根が残存し、内部は中空で横方向のケズリ痕が観察される。杯部の底下面には製作時における芯棒先端の刺突痕がある。胎土には白色、黒色微砂粒を僅かに含む。色調は内外共に、にぶい橙色(7.5Y R6/4～7/4)である。口径16.8cm。

3は報告書番号[32]の布留系高杯で、ほぼ完存ながら杯部底を欠損する。杯部外面には横方向の微弱

な条線が多数観察されるが、ミガキではなく回転力を利用したヨコナデの痕跡であろう。体部から口縁部へ緩やかに内湾しながら移行し、口縁部は僅かに外反する。口縁端部には極めて弱い端面をもつ。脚柱部は裾広がりの筒状に開き、広がった脚裾部とは緩やかに画される。脚柱部外面には、杯部との接合部直下にヘラナデの後、弱い縱方向ハケが施されている。その他の脚部外面はヨコナデである。脚部内面調整は、脚柱部が横方向ケズリ、脚裾部が横方向ハケである。ハケの単位は5本/cm。胎土は精良。色調は外面が灰黄色(2.5Y7/2)、内面がにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。口径16.4cm、器高13.3cm。

4は報告書番号[9]の小形丸底土器である。扁珠状の体部に、外上方に長く延びた口縁部を備える。体部最大径は中央より上方にあり、やや肩が張る。口縁部は極めて緩やかに内湾する。頸部内面のくびれに生じる稜線は、やや強い部分と弱い部分が混在する。外面には回転力を利用したミガキBが認められるが、微弱でヨコナデと区別しにくい。内面はナデ、ヨコナデによる器面調整を行う。色調は外面がにぶい橙色(7.5YR7/3)、内面が灰褐色(7.5YR6/2)である。復原口径10.2cm、器高8.2cm。

5は報告書番号[8]の小形丸底土器である。扁珠状の体部に、外上方に長く延びた口縁部を備える。頸部のヨコナデはやや強く、口縁部は緩やかに内湾して延び、端部は僅かに外側にはねる。頸部内面の稜線は明瞭である。底部の中心からやや外れた位置に直径4cmの円孔があり、辺縁が平滑なため焼成前穿孔かと思われる。外面の調整として、肩部を縦方向のハケ(6本/cm)、体部最大径部を時計回りのケズリで形成し、口縁部下半から体部にかけて密なミガキBが施される。体部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデによる調整を行う。胎土は精良である。色調は外面がにぶい橙色(7.5YR7/4)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。復原口径9.7cm、器高8.1cm。

6は報告書番号[21]の小形器台Cである。口縁部はやや内湾気味に外上方に広がるが、端部は僅かに外反する。口縁端部と口縁部直下内面は、回転力を用いたヘラナデによって面取りされ、弱い稜線が形成されている。脚部は直線的な外形ラインを描いて円錐形に広がる。外面の調整として、口縁部下半と脚部上半に縦方向のヘラナデによる面取りがある。口縁部外面にはミガキBがよく残るが、脚部はかなり表面が磨耗しており、ミガキの有無は不明である。脚部内面の上半部は2段の時計回りのケズリ、下半部はナデで調整され、部分的に指頭調整痕が残る。受部と脚部を直径0.6cmの円孔が貫通する。胎土には僅かに石英粒等を認めるが、概ね精良である。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR6/3)、内面が褐灰色(10YR6/1)である。口径7.4cm、器高7.3cm、裾径9.4cm。

7は報告書番号[23]の小形器台Cである。口縁部はやや内湾気味に外上方に広がるが、端部は僅かに外反する。脚部はやや内湾気味の円錐形に広がるが、裾部は僅かに外反する。外面の調整として、口縁部下半と脚部上半に縦方向のヘラナデによる面取りがある。口縁部内外面、及び脚部外面にはミガキBがよく残る。ヨコナデのように見える回転力を利用したミガキである。脚部内面の上半部は時計回りのケズリ、下半部はナデで調整される。受部と脚部を直径0.7cmの円孔が貫通する。胎土は精良で、色調は外面が灰黄色(2.5Y7/2)、内面が黄灰色(2.5Y6/1)である。口径8.4cm、器高8.5cm、裾径11.6cm。

4. 布留式前半における主要器種の動態

a. 型式学上の変遷

下田III式とそれに後続する資料から、相互に比較可能な布留式土器を抽出し、その主要な器種についての変遷をFig.457・458に示す。また変遷図の作成にあたっては、SW1365資料における下田III式最古相の器種を、III式の主体から分離して掲載した。なお下田III式の様相は、当然ながら和泉北部域での布留式開始期の組成であり、細部は河内・大和と状況が異なることも有り得る。

直口壺は下田II-2式(古相)から出現してIII式に継続し、布留式における壺組成の主要器種として展開する。和泉地域で確認できる直口壺は、II式段階では大形のAのみであり、小形のBは下田III式で出現する。口縁部の形態は直線的なものと、やや外反したものがあり、法量やプロポーションは個体差が大きい。調整は直口壺Aが平滑技法、直口壺BがミガキBを主体にする傾向があるが、厳密には区別されない。またいずれも内面にケズリを有する個体がある。稀に口縁端部の形態や肩部横方向ハケの使用、および頸部のやや下方以下にケズリを加える点で、布留式壺と手法を共有するものがある。

平城宮下層SDの直口壺は、下田III式と同様に壺組成の主体をなす。外面の調整はナデ、ハケが多いことから、下田III式より調整の面では簡略化している。口縁部の形態は薄く尖り気味のものと、甕口縁端部におけるr形態をもつものがあり、後者はIII式にみる例と同様に布留式壺と共通の手法である。

小若江北式では口縁部の開きの大きい直口壺A、直線的な口縁部をもつ直口壺Bがあり、両者の系譜が継続していることを示すが、この器種における口縁部形態の変異は不明である。

複合口縁壺Cは、下田III式でCa、Cb、Ccの各法量のものが出現し、壺組成において直口壺に次ぐまとまった器種となる。外面に精緻なミガキBを施した個体が多く、また稀ではあるが波状紋などで口縁部外面を装飾するものもある。これら装飾系の複合口縁壺Cは、Cb、Ccに認められるが、Caは無紋のようである。頸部から口縁部にかけてはシャープに作られている。Caの頸部は直立気味にやや外傾するが、Cb、Ccは残存状態が不良のため明らかではない。

平城宮下層SDの複合口縁壺Cには、Ca、Cb、Ccが認められる。形態上の大きな変化は指摘できないが、調整はすべてハケ、ナデによっていることから、下田III式段階より簡素化が進むようである。また口縁部外面についても無紋化する。Cb、Ccの頸部は強く外傾し、下端部に低い突帯をもつ個体がある。このような突帯をもつ複合口縁壺Cは、下田III式にも若干量が存在する。なお、小若江北式の複合口縁壺はこれらと系譜が異なるため、対比させることができない。

布留式壺は下田III式の段階で、おそらく布留式祖形壺Fと密接な関わりをもって出現する壺で、III式最古相では存在が確認されていない。本様式における布留式壺は、壺の組成中で主要な位置ではない。器形はほぼ確定し、内面ケズリや肩部のヨコハケなど、調整に関わる属性が基本的に備わっているが、なお細部には不安定な様相を残している。特にその様相は口縁部において顕著で、端部はn・m・o・p形態をとるものが多く、定型化した布留式壺に通有なq・r形態が少ない。また口縁部が内湾するものより、直線的に外上方に延びる個体の方が多い。一般的の認識に基づく「布留式壺」とは、口縁部が定型化された壺をさす。しかし、下田III式の布留式壺はこの概念とは異なるもので、口縁部形態の型式学的所見からみても、定型化を果たす以前の先駆形態として捉えることができる。本様式での壺の主体は布留式祖形壺で、弥生形壺や庄内式壺も低率ながら組成中に含まれている。

平城宮下層SDの段階では、弥生形壺、庄内式壺、布留式祖形壺が組成からほとんど消え去り、布留式壺が優勢の器種構成となっている。本段階の布留式壺の口縁部は外傾するものも残るが、およそ内湾する形態が主体的である。また口縁部形態にはj・p・q・rがあり、なかでも明瞭な端面形成を行うr形態が多数を占めている。口縁部の内湾と口縁部形態rは、通常の布留式壺に備わる普遍的属性である。従って、細部の形態的特徴が収斂されることによって、下田III式に濃厚であった不安定な属性がほぼ払拭され、本段階において布留式壺の定型化が達成されたと理解し得る。

小若江北式の布留式壺は、いずれも口縁部が内湾するが、その傾向は個体により強弱がある。口縁部形態はp・q・rが認められ、q・rを主体とする。いずれも明瞭な端面形成を行い、特にr形態の内

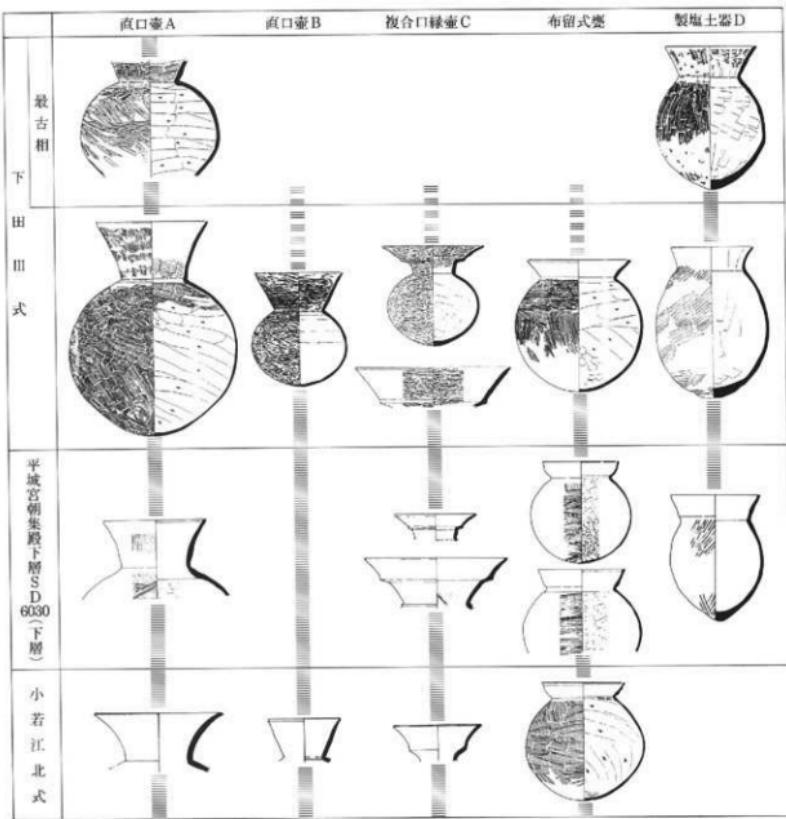


Fig. 457 下田Ⅲ式以降の主要器種変遷(1) S=1/8

傾する端面の幅は、前段階までと比べて広くなっている。体部外面の調整はハケによって行われる。肩部に横方向ハケを全周させる通有の要の他、縦方向ハケの後に横方向ハケを全面に粗く施すもの、全面を斜方向ハケ調整するものなどの多様性がある。斜方向ハケは左下がりで、下田Ⅲ式段階の布留式祖形要にみられる右下がり斜方向ハケとは、方向が異なっている。

有縫高杯Cは布留式前半を通じて存続する高杯で、下田Ⅲ式最古相の段階では、II-3式のCと比べて目立った形態変化はなく、口縁部が直線的に大きく広がり、脚柱部の脚裾部への開き方もまた比較的大きい。外面の調整はミガキBにより、口縁部内面にはミガキCを施す。Ⅲ式の主体では、口縁部の立ち上がりがやや急角度になり、脚柱部の開き方も小さくなる傾向をもつ個体が現れる。また最終調整はミガキBを主体とするが、口縁部内面のミガキCは丁寧に施す個体や、これが乱れた粗雑なもの、ハケ調整のみのものなど、全体的に簡素化の傾向が窺える。

平城宮下層SDでは、有縫高杯Cは口縁部の立ち上がり角度がさらに大きくなり、杯部の径に対する

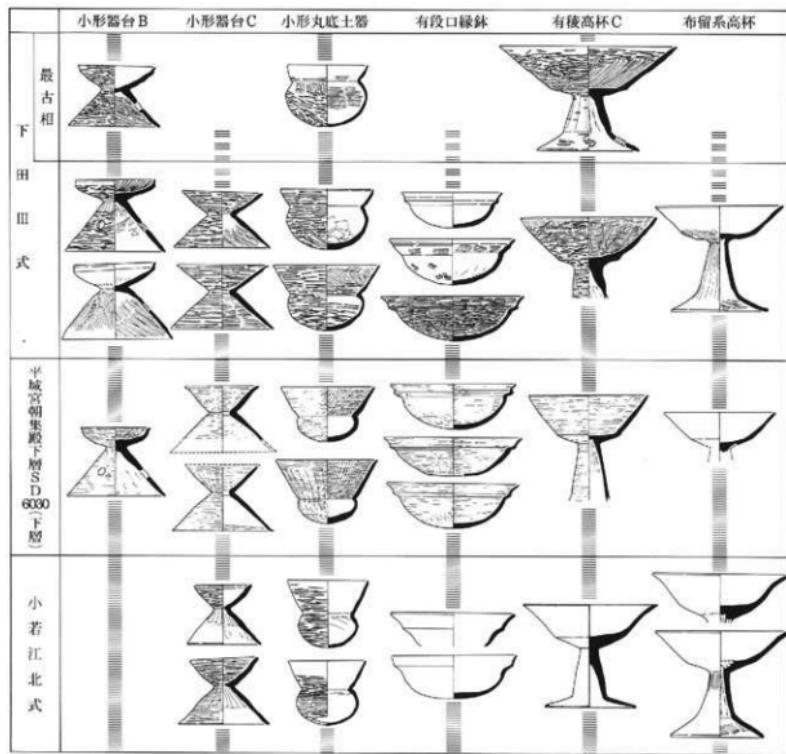


Fig. 458 下田III式以降の主要器種変遷(2) S=1/6

る口径の割合が低下すると共に、脚柱部は裾がさらに狭まる。調整は外面と口縁部内面がミガキBにより、口縁部内面のミガキCは欠落している。

小若江北式でも有稜高杯Cが組成に含まれる。口縁部には僅かな外反傾向が看取され、口径がやや大きくなる傾向にあるようである。脚柱部は前段階と同じく絞られており、また脚裾部は脚柱部と明瞭に画されて短く広がる。調整は不明である。

布留系高杯は下田III式で出現するが、最古相の組成に含まれるか否かは不明である。杯底部の棒状工具の刺突痕は、出現当初から小若江北式まで認められ、布留系高杯における安定した製作技法の継承が窺える。各段階を通じて大きな形態上の変化は認められないが、平城宮下層SD段階以降は調整がナデ主体となり、小若江北式では口縁部が僅かに外反する傾向をもつようである。

有段口縁鉢は下田III式で初めて出現する。この器種の遡源は、おそらく弥生系の小形鉢Cbに求められるであろう。和泉北部域の小形鉢Cbには、下田II-1~2式の段階で、口縁部が内湾する傾向をもつものがある。また口縁部に緩やかな段が形成された個体もある。こうした特徴は、河内地域では上六万寺式の組成中の鉢において既に萌芽的なものがみられ、この系譜の延長として、やがて口縁に有段部

を設けた鉢が定着していくと思われる。庄内式、あるいは布留式を主体的に醸成した地域では、おそらくその地における在来系の小形鉢Cbの系譜から、有段口縁鉢への展開が辿れるであろう。しかし和泉北部域では、小形鉢Cbは大きな展開をみせることなくほぼ絶滅し、小形鉢Ccを後継器種として、その系譜をIII式まで細々と温存させるに過ぎない。小形鉢Ccには精製品がほとんど含まれず、形態的にも退化傾向が著しい。このような状況に対し、有段口縁鉢はかなり完成された形で、しかも下田III式の組成に突如として加わる。すなわち他地域において、型式学的変遷の結果として定着した有段口縁鉢の器形概念が、III式段階に至って泉州地域に移植されたと見なすことができよう。

下田III式の有段口縁鉢の口径は12.1～18.1cmで、法量の分布範囲に幅がある。このように口径を中心にみた法量が幅を有する点に、この器種における不安定な様相を指摘できる。しかし、口径14cm未満の小形の有段口縁鉢は6点で、組成中に占める位置は極めて低い。また口径15～16cm前後のものが主体をなすことから、不安定さの中にも法量が定まっていく方向性が看取される。口縁の有段部の形態には諸相があり類型化は困難であるが、屈曲がさほど強くない個体が多いようである。主要な調整は平滑技法、あるいはミガキBによるものではほぼ折半されているが、両技法が1個体に混在して用いられる例はない。また胎土に関して、前者は概ね粗い素地を使用するが、後者では精製品の比率が高い。すなわち胎土と調整技法の相関関係から2系統に細分が可能で、一般的に後者が精製土器として認識される属性を備えたものといえるが、前者の系統は下田III式における地域偏差とも考え得る。前述したII式の小形丸底土器の様相と酷似した状況がある。

平城宮下層SD資料の有段口縁鉢の多くは、口径が15.4～16.2cmの範囲に収まり、ほぼ16cm前後に集中することから、法量における安定化の達成されたことが分かる。口縁の有段部形態にはやはり諸相が認められるが、前段階と比較して、有段部上半の屈曲が強調された個体が目立つようになっている。胎土は大半の個体について精良で、また調整はミガキBによっている。すなわち平城宮下層SD資料の有段口縁鉢には、粗い胎土と平滑技法を組み合わせる系統がみられない。

小若江北式の有段口縁鉢は、口縁部における有段の特徴を残しながら、前段階までと比較して口縁部と体部の境界が、よりなだらかに移行するようになる。その他に顕著な変化は認められない。

小形器台Bは庄内式併行期から引き続いて、口縁端部の拡張という方向性をもって受部の形態が変化する。下田遺跡では小形器台B₁～B₃までの各形態を含む組成が、II-2式新相からIII式に継承されるが、III式の段階ではB₄が出現して優勢となる。調整はミガキBによるものが主体であるが、ミガキAも組成に含まれる。また外面にミガキBをもつ個体では、受部内面にミガキCを伴う例が多い。

小形器台Bにおける口縁端部の変化は、平城宮下層SD資料にそのまま受け繼がれている。本段階の小形器台Bの口縁端部はB₄よりさらに上方に拡張されて、S字状に近い形態まで外反傾向が進行する。このように受部は比較的顕著な変化をみせるが、脚部には目立った変化がない。胎土は精良で、調整は外面がミガキB、受部内面がミガキCによる。

続く小若江北式の資料では小形器台Bが欠落している。下田III式と比較して平城宮下層SDの段階以降には、小形器台Cの増加に反比例するように、Bの占有比率が急速に減少する傾向が看取される。こうした組成比の変化から類推すると、小若江北式ではさらに組成の変成が進んで、小形器台Cの優勢が決定的になっていたとみられる。

小形器台Cは下田III式の中で出現する器台で、安定した器形をもつ複数の個体がSD1108から出土している。III式における小形器台Cは口径が従径よりも僅かに小さい。口径a、裾径b、器高cを計測し各

比率を百分比で求めると、 a/b は82~92%，平均値87%となって、口径が裾径に接近した数値が得られる。また c/b は62~68%，平均値65%で全体のプロポーションが扁平に近い。形態上の特徴は、受部と脚部の外形線が直線的で、口縁端部には微弱な外反傾向が認められるが、脚裾端部と共におよそ直線的でシャープな外形線を描く。貫通孔の直径は1.5~2.2cmで、1.8cm前後の個体が多い。いずれも精良な胎土をもち、外面は精緻なミガキBで調整される。また受部内面の調整にはミガキB・Cがある。

平城宮下層SD段階において、小形器台Cは器台の主要部分を構成する。本資料では a/b は72%で、下田III式と比べて裾径に対する口径の割合がやや低下し、受部全体が相対的に小形化する。 c/b は68%でIII式分布域の上限と一致するが、総じて縦長になる傾向が窺える。受部は前段階より急角度で立ち上がると共に、僅かに内湾しながら端部は逆に外反傾向が強まるので、III式の特徴であったシャープな外形線を喪失しつつある。胎土は精良で、外面、受部内面にミガキBを加える。

小若江北式では器高に大きな変化がなく、また a/b は72~79%で平城宮下層SD資料に近い数値を示す。しかし c/b は73~78%となっており、器高に比べ裾径の割合が縮小して全体のプロポーションは前段階よりさらに縦長となる。形態上の特徴として、相対的に器壁は肉厚で、口縁端部の造作もシャープさが失われて鈍化する点を指摘できる。受部は縮小すると共に内湾し、半球形に近い形状となるが、口縁端部の外反傾向はそのまま残される。貫通孔の径は0.6~0.7cmで、III式段階と比べ半分以下に縮小する。胎土は精良で、最終調整をミガキBに委ねる属性に変化はない。

なお、豊中遺跡の暗茶褐色粘土層からは、型式学的に極めて退化した小形器台Cが、初期須恵器や後半期布留式土器などと共に出土している。従って少なくとも和泉地域では、小形器台Cの系譜は初期須恵器の出現段階まで下る可能性も考慮できる。

小形丸底土器は、布留式土器群で最も形態変化が著しい器種で、口縁部および体部の比率変化によって型式学的な変遷を辿ることができる。下田III式最古相として確実視される小形丸底土器はBaで、おそらくこの段階において、小形丸底土器Aaも併存していたであろう。しかしAaは早い段階で途絶し、小形丸底土器の系譜はBaをプロトタイプとしてIII式以降に急速な展開を遂げる。III式における小形丸底土器の主体はBb~Beで、Cも極微量であるが出現し始める。主要な調整は平滑技法、あるいはミガキBによるもの二者があり、また両技法が1個体に混在して用いられる例は皆無である。量的な比較では前者が後者を凌駕する。胎土に関しては、前者が概ね粗い素地を使用するのに対し、後者では精製品の比率が高い。すなわち胎土と調整技法の相関関係から、さらに2系統に細分し得る。一般的に後者が精製土器として認識される属性を備え、前者の系統は下田III式における地域偏差とも考え得る。

統いて、下田III式と平城宮下層SD資料との比較のため、Fig.459に小形丸底土器の法量分布を示す。本図は小形丸底土器の計測可能な個体について、口径 a 、体部径 b 、器高 c 、口縁部高 d の各法量を図上で計測し、 b/a を横軸、 d/c を縦軸にとって、百分比でこの器種における形態変化を求めたものである。まず前提として、口縁部の発達、および体部の縮小という不可逆的な型式学上の変遷を認める。こうした観点に立脚すれば、III式最古相としたSW1365資料(681)の形態は、小形丸底土器B系列の中でも明らかに最も遡源的な値を示すことが分かる。数値からみて本資料よりさらに古い様相を示すものは、A系列の(1019)1点が存在するのみである。小形丸底土器Bは、型式学的な変遷を辿りつつ下田III式で大きく展開している。小形丸底土器Bにおける各比率値の分布範囲は、 b/a が66~102%， d/c が22~55%である。またこの分布域から離れて小形丸底土器C(1070)が単独で出現している。一方、平城宮下層SD資料から求めた分布域は、 b/a が46~69%， d/c が52~65%であった。この数値は、下

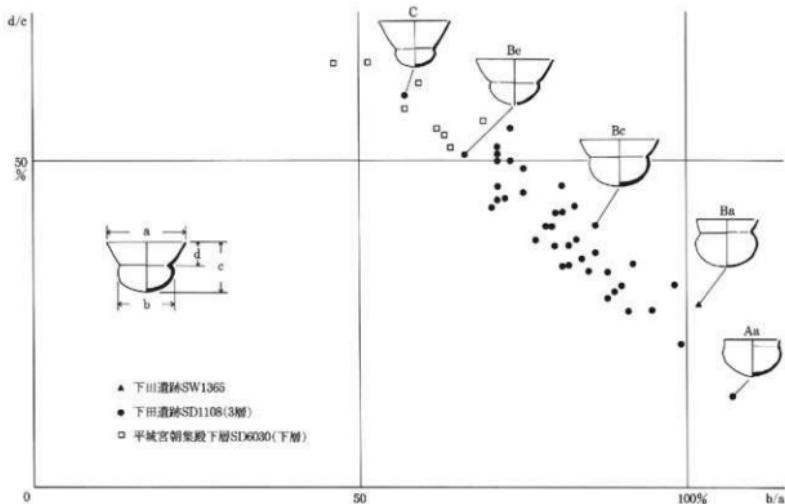


Fig. 459 下田III式・平城宮下層S Dの小形丸底土器法量分布

田III式の小形丸底土器Bと、平城宮下層S Dの小形丸底土器の形態比率がほぼ重なることなく分布しており、さらに後者が型式的に後出することを表している。この状況は、Fig.459の分布からも明らかに読み取ることができる。平城宮下層S D資料は、小形丸底土器Beよりさらに口縁部が発達して延びる傾向が強いが、これに対して体部径は不約合いなほど縮小している。すなわち下田分類による小形丸底土器Cによって、すべてが占められている。なお、口縁部の外傾角度については「いずれも55~65°の範囲内にあり、ほぼ60°前後に集中」と報告されている。下田III式にみられる小形丸底土器C(1070)は、完形品で計測すると $b/a = 57\%$ 、 $d/c = 60\%$ 、口縁部の外傾角度が58°を示し、平城宮下層S D資料の平均的な形状を呈することができる。しかし、下田III式において小形丸底土器Cの出現率は3.2%と極めて低率であり、また全体的な土器相からみて、より新しい段階の土器の混入とは認められない。従って、III式段階における先行取得的な個体と見なし得る。

以上のような小形丸底土器の形態変化は、平城宮下層S Dの段階で発達の極に達して頭を打ち、その後は異なる変化の方向を辿る。小若江北式は変化が転向する最初の段階で、口縁部の外傾角度は63~68°の範囲をもち、平均値は64°であることから、前段階より急角度になっていることが分かる。このような口縁部の変化と連動して、体部高の口縁部高に対する比率が、相対的に増大する傾向が窺える。また、前段階における体部の形態は押し潰した扁球形を呈していたが、径に対して高さが加わり始める。精良な胎土が用いられ、ミガキBによる調整が行われる点に変化はみられない。

製塙土器Dは下田III式最古相の段階で、その出現が確認される器種である。口縁部はやや長めで外上方に開き、底部は尖底気味である。外面の調整はハケによっている。現状では本資料が泉州地域で最も遡る製塙土器Dであるが、下田III式に併行する萱振遺跡S E03資料の同器種は、平底を備えている。型式学的変遷を想定すれば、平底は尖底化する以前に位置づけられることから、その祖形を庄内式新段階まで遡らせて考慮する余地がある。下田III式の主体となる組成では、製塙土器Dにはタタキ、ハケ、

ナデの三者が認められ、底部形態も尖底に加えて丸底を呈するものが現れる。形態や調整を同じくするが、法量において器高20cm前後の小形品と、器高25cm前後の大形品が認められる。口縁部は内湾傾向をもってやや外上方に短く開くものが多いが、ほぼ直立する形態もある。

平城宮下層SD資料の製塙土器Dは、尖底をもつタタキ成形のもので、口縁部は外上方に弱く広がりつつ短く延びる。下田III式のものと顕著な形態上の相違点は見出せない。製塙土器Dの系譜は、本段階で衰退に向かうとみられ、比較的寿命の短い器種であったといえよう。

b. 組成の変遷

下田III式のSD1108や、平城宮下層SDの各出土土器は、前者が999点、後者が472点であり、いずれも資料母数が大きい。従って、遺跡の所在が和泉と大和という地域性に留意した上であれば、組成の比較検討に有効な資料となり得る。ここでは、下田遺跡SD1108資料を下田III式の代表的組成とし、平城宮朝集殿下層SD6030下層をそれに連続する様式の標識資料として比較する。Fig.460に両標識遺構出土土器の総体における器種組成、および器種別の組成を百分比で比較した。

まず出土土器総体の組成をみると、下田III式と平城宮下層SDにおいて、土器総体に対する双方の比率が極めてよく一致する器種がある。壺(12.2~12.9%)、甕(45.2~46.4%)、高杯(4.0~3.8%)の3器種である。すなわち下田III式から平城宮下層SD段階にかけては、土器組成の形成時間差を超えて壺：甕：高杯=3:11:1の組成比がほぼ保たれている。また、小形器台は下田III式で4.1%、平城宮下層SDで6.1%と1.5倍になっているが、数値が小さいために大幅な相違ではない。当然ながら、これらの器種組成はある時間幅の中で形成されたもので、一時点の状況をそのまま表すとは解釈できない。土器の組成比は、その生産率と廃棄率との均衡の結果として生じたもので、これらの器種における安定した比率は、計測の誤差や地域偏差の存在を考慮しても、なお良好な一致をみせたものといえる。従って、ある程度の時間幅の中においては、土器組成が標準化される可能性の高いことを窺わしめる。しかし器種ごとの組成比に顕著な変化がなくとも、同一器種内において器形の交替や変遷が進行し、その内容には変成を生じせしめている場合もある。

上記の器種群の状況に対し、鉢や小形丸底土器では総体における器種の比率を大きく変化させている。下田III式から平城宮下層SDの段階にかけて、鉢は23.4%から10.6%に半減し、小形丸底土器は7.2%から19.3%まで3倍近い増加をみせる。製塙土器は下田で2.9%であるが、平城宮では0.6%である。製塙土器に関する量的な差異は地域偏差に起因するとみてよい。

次に布留式を構成する主要組成を、器種別にみてみよう。

壺組成においては、直口壺、複合口縁壺Cがまとまった群を形成する。下田III式、平城宮下層SDとともに、その組成は直口壺が47.5~49.2%、複合口縁壺Cが12.3~13.1%でよく一致し、およそ4:1の割合で出現することが分かる。壺組成の約6割を直口壺と複合口縁壺Cの2器種が占める状況にあり、この組成比は下田III式の段階ではほぼ固定され、平城宮下層SDの段階に継承される。他の壺は変異が大きいため類型化にくく、明確な対応関係は導き出せない。平城宮下層SDでは、内湾する口縁部に球形体部をもつ小形壺が、壺組成の24.6%と高い占有率を示す。この器種は下田III式の組成には含まれず、平城宮下層SDの段階で新たに展開する壺であろう。

下田III式における甕の組成は、布留式祖形甕が主体的な位置にある。布留式祖形甕と布留式甕の合計は76.3%で、およそ甕全体の3/4を占める。この両者は、破片での分別が困難な場合があるため、それぞれの正確な数量比は算出できないが、組成の大半は布留式祖形甕であり、布留式甕は量的な面で遙

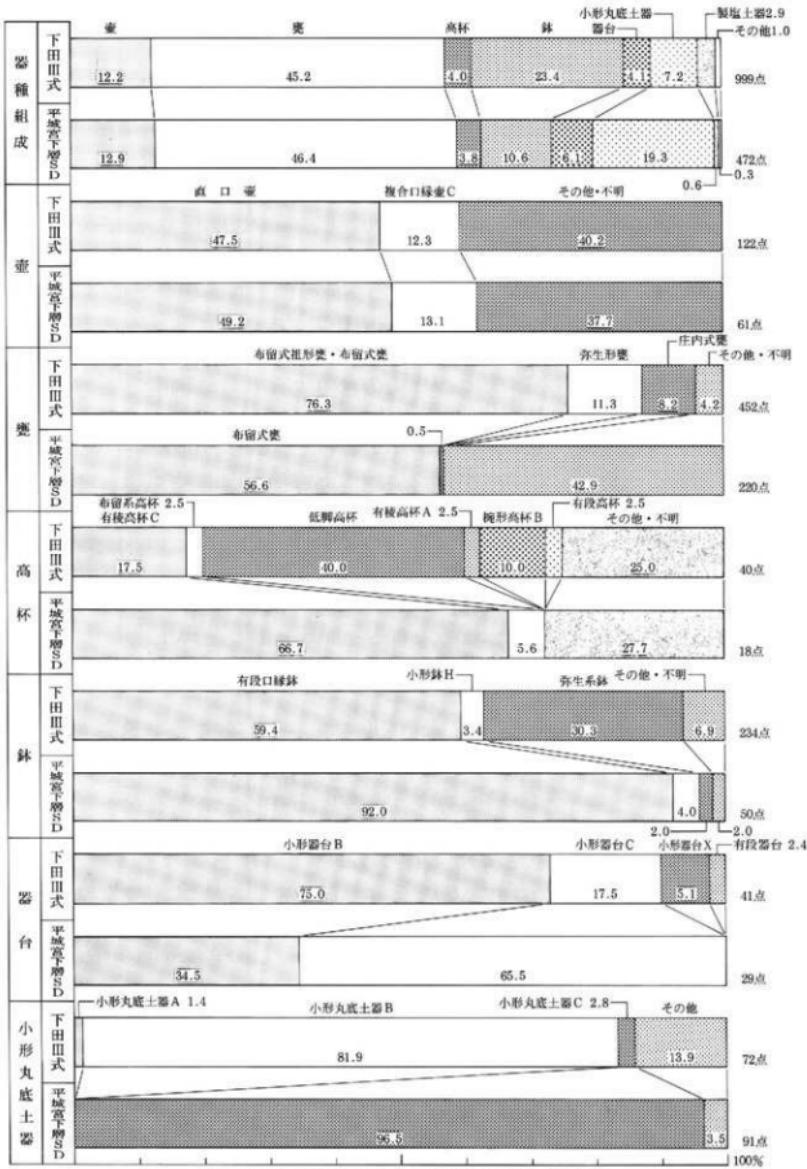


Fig. 460 下田Ⅲ式・平城宮下層 S D 出土土器の組成比較

かに劣っている。下田III式では他に弥生形甕が11.3%，庄内式甕が8.2%程度で存在する。ただ、下田III式に弥生形甕が根強く残る組成については地域偏差とも考え得る。平城宮下層SDの段階では、下田III式の段階より型式学的な安定性を獲得した布留式甕が台頭し、甕組成の56.6%を占めるようになる。弥生形甕、布留式祖形甕の系譜は不明であるが、報告書中で「甕C」「甕D」とされる外面ハケ調整の甕については、関連を考慮する余地がある。これらの系譜が弥生形甕、布留式祖形甕と連絡をもつと仮定すれば、甕組成中では前者が15.5%，後者が1.8%で、両者を合わせるとまとまった数量比になるが、それでも主体の座にある布留式甕と比べれば遙かに低い位置にある。庄内式甕も0.5%に過ぎず、下田III式で残存した弥生・庄内の様相はほぼ払拭されたといえよう。平城宮下層SDの場合には、甕組成の13.2%は東海系のS字状口縁付甕が占め、量的にまとまった群を形成する。この器種は下田III式では0.7%と極めて稀で、地域偏差の存在を窺わせる。

高杯の土器総体に対する組成比には大きな変化が認められないが、高杯組成中の器形の交替が進行する。下田III式では、型式学的に不安定な低脚高杯が40.0%と最も優勢である。弥生系の有稜高杯Aが2.5%，庄内系と関連をもつ楕形高杯Bが10.0%，有段高杯が2.5%と、弥生・庄内系が全体の15.0%を占める。有稜高杯C、および布留系高杯は、布留式の高杯の主要組成となるが、下田III式の段階では前者が17.5%，後者が2.5%，すなわち相互の組成比率は7：1で、布留系高杯は量的に微々たる存在である。他の高杯は変異が大きく、また搬入された外来系上器とみられる。平城宮下層SDの段階では有稜高杯Cが66.7%と著しい増加をみせ、高杯組成中で1/3を占めるようになる。これに対して布留系高杯は5.6%と、なおも組成中において低い位置にある。有稜高杯Cとの相互の比率は12：1で、下田III式よりさらに数量格差が拡張するようにみえる。布留系高杯は布留式後半期に至って、より主体的に展開する器種とみられるが、少なくとも平城宮下層SDの段階までは目立った動向を示さない。

鉢の組成比は、下田III式から平城宮下層SD段階にかけて半減し、また内容的にも大きな変化がみられる。下田III式では鉢組成の59.4%を有段口縁鉢が占めており、出現当初から早くも主要な位置にある。同時に出現する小形鉢Hは3.4%と低率である。合計すると30.3%を占める弥生系の鉢、すなわち小形鉢A～D、中形鉢、大形鉢、超大形鉢、有孔鉢などの存在は、全器種の中で鉢が最も弥生的な様相を残留させる結果を生み出している。こうした傾向は、下田III式の地域偏差とも考えられる。平城宮下層SDでは有段口縁鉢が92.0%と、鉢組成のはほとんどを占有するに至る。対して小形鉢Hは4.0%，弥生系の鉢（小形鉢A）は2.0%と極めて低率であり、平城宮下層SDの鉢組成は、下田III式よりも有段口縁鉢に極めて純化された構成となっている。下田III式と平城宮下層SDを比較する限り、総体における鉢の減少は弥生系の鉢が組成から脱落することに起因するようであり、このことはまた、従来の弥生系の鉢のもつ実質的な機能が有段口縁鉢にそのまま移行したことを表している。

小形器台は土器総体の中での組成比に顕著な変化がみられないが、器台組成中で器形の交替が進行する。下田III式では小形器台Bが75.0%，Cが17.5%を占め、その組成比はB：C≈4：1である。これに対して、平城宮下層SDにおいては小形器台Bが34.5%，Cが65.5%であり、その組成比はB：C≈1：2となる。すなわち下田III式から平城宮下層SDの段階にかけて、小形器台BとCの比率の関係が完全に逆転し、布留式前半の組成においてBは劣勢、Cは優勢の傾向をもって変遷したことが分かる。また下田III式では小形器台B・Cの他に庄内系の有段器台が2.4%を占め、残りの5.1%を不安定な形態を有する小形器台Xが占めている。小形器台Xは、小形器台Bを模倣した在地色の強い器台とみられるが、平城宮下層SDにおいて器台はすべて小形器台B・Cの二者のみで構成されており、より純化され

た布留式の組成を示す。

小形丸底土器は下田III式から平城宮下層SDの段階にかけて、組成中の占有率を大幅に増加させる。この器種は型式変化が速く、その変遷の結果としてA・B・Cの各形態を出現させる。こうした型式学的な関連をもつ小形丸底土器が、下田III式の段階で合計86.1%と優勢な位置にある。さらに細分器種ごとの比率をみれば、Aが1.4%、Bが81.9%、Cが2.8%であり、なかでもBが圧倒的に高い比率を占める。このことは、あくまでも下田III式に設定した様式が有する時間幅の中において、Aの退潮とBの盛り行、そしてCの出現を、同時に捉えたものである。平城宮下層SDでは、すべての小形丸底土器A・Bが駆逐され、Cが96.5%の高率を占めるようになる。しかも他器種との比較において小形丸底土器Cの絶対量が増加し、土器総体の組成中でも大きな変容を遂げる。

c. 布留式前半の区分

これまでの分析結果を要約する。下田III式の主要土器組成は、完全に布留式の範疇に属するが、同時に古い土器組成の残滓、すなわち弥生系・庄内系の様相を一部に残している。布留式甕、有段口縁鉢、小形丸底土器などには祖形のかつ不安定な様相が具備され、布留式祖形要是その存在 자체が不安定である。主要器種である直口壺、小形器台B、小形丸底土器など、庄内式から直接の系譜を辿ることのできる多くの器種は、本段階において布留式の土器組成として転換を遂げていく。これらに対し、小形器台Cや製塩土器Dは、突如として布留式の組成に加わる。

平城宮下層SDの段階では、下田III式に残留した弥生・庄内系の要素などがほぼ払拭され、布留式祖形甕など不安定な器種もほぼ一掃される。前段階で成立した布留式の土器組成が、より純粹な形に昇華される段階として捉えられる。加えて布留式甕、小形丸底土器、有段口縁鉢などの器種では、前段階にみられた細部における不安定要素の統合、器形の洗練などが達成され、概ね型式学的な完成期を迎える。

小若江北式は布留式の組成を、基本的にそのままの形で前段階から継承する。しかし小形器台Bや製塩土器Dの衰退など、一部の器種については組成から離脱する傾向が現れ始める。また小形器台C、小形丸底土器、有段口縁鉢などの主要器種において、型式学的には退潮の兆しが看取される。これら諸段階の前後関係は、型式変化が速い幾つかの器種、および組成変化からも裏付けることが可能である。

從来より、平城宮下層SD資料は小若江北式に先行し、布留式前半前葉に相当すると把握されてきた。この見解に概ね異論はない。しかし、より厳密な視座に基づけば、河内地域における平城宮下層SD併

Tab.45 布留式における下田III式の相対的位置

土器様式区分	庄内式(併行)期	布留式					
		前半			後半		
		新段階	古段階	中段階	新段階	古段階	中段階
下田編年 併行あるいは後続する標準資料	下田II~3式	下田II式					
		船尾西遺跡S G001 貴振遺跡S E03	平城宮朝倉殿下層S D6030下層	小若江北式			
安達・木下編年 (1974)		坂守寺跡下層 平城宮朝倉殿下層等		上/井手S D031 御原宮内裏東外郭S D912・SD914	上/井手遺跡S E G30下層	上/井手遺跡S E G30上層	
		第1期		第2期	第3期	第4期	
佐田編年(1984)		布留I後式					
		布留0式	布留1式	布留2式	布留3式	(古) 布留4式(新)	
寺沢編年(1996)		布留II式					
		庄内新規	布留式古規		布留式新規	布留式以後	
木田編年(1991)	庄内式規Ⅳ	庄内式規Ⅳ=布留式規Ⅰ		布留式規Ⅱ	布留式規Ⅲ	布留式規Ⅳ	布留式規Ⅴ

行資料に、萱振遺跡 S E03を充てる認識は修正されねばならない。萱振遺跡 S E03は下田Ⅲ式と併行関係をもつてゐる。すなわち下田Ⅲ式の認識により、現行で二分されている布留式前半を三分割する必要が生じ、下田Ⅲ式を平城宮下層SDに先行する段階として、明確に分離しなければならない(Tab.45)。そして三分割した各区分について、下田Ⅲ式を古段階、平城宮下層SDを中段階、小若江北式を新段階とする。各段階における布留式諸相は、端的にいえば古段階を搖籃期、中段階を完成期、新段階を衰退期の端緒として捉えることができる。

第5節 下田遺跡を巡る地域史

第1項 和泉・河内土器編年の併行関係

前節までに明らかにした和泉地域北部における土器の編年観に基づき、下田遺跡を巡る地域史についての言及を試みる。和泉の地は、地理的にみれば河内に隣接しており、また庄内式土器を代表する庄内式甕をみても河内型のAが存在するのみで、大和型の撇入は絶無に近い。従って、少なくとも和泉の土器文化は、大和よりも河内への強い傾斜が窺われる。従って下田II・III式について、河内地域の土器編年(米田1991・1994)との併行関係を検討し、両地域の土器様相の格差を、まず明らかにしておく必要がある。米田は特に甕の変遷を機軸に編年を実施しており、この点で高杯を重視した下田編年とは基準が異なる。よって両編年の完全な整合を望むことはできないが、ここでは主として和泉に撇入された庄内式甕Aに依拠しながら、およその併行関係を推定する。

庄内式期Iは上六万寺式に後続し、北鳥池下層式の範疇で捉えられる段階である。畿内第V様式的な要素を強く残しながら中部、東部瀬戸内の強い影響も窺えるとされる。中田遺跡刑部土坑では北鳥池式のV様式系甕、初源的な庄内系甕、「直線的な口縁をもつ祖形的な庄内系高杯」(有稜高杯C)、「全面ハケ調整の甕」(布留式祖形甕)、初源的な小形丸底土器などの器種組成がみられ、庄内式甕・布留式祖形甕の遷移形態のものが出現している点で重要である。甕は球形化が進行し、加飾性の複合口縁甕、加飾性の有段高杯が出現する。また同じく庄内式期Iとされている中田遺跡SX1からは小形器台Bの出土も知られる。ただし河内平野の大半の地域ではV様式系の甕や高杯が残存し、庄内系甕、庄内系高杯を出土する遺跡は限定され、庄内様式の萌芽的な様相を呈する。

和泉北部では、第V様式からの上器組成に変化が生じ始め、北鳥池下層式に近い様相をもつとした下田II-1式が、庄内式期Iとはほぼ併行する。複合口縁甕Bや小形器台Aは、組成変化を代表する器種であるが、弥生形甕、鉢等の器種では大幅な変化を認め難く、また庄内式甕は組成に含まれない。弥生形甕では超小形のAeの一部を除き、北鳥池下層式のような下膨れの体部をもつ個体は出現しておらず、より第V様式的な古い形態を保持する。また最終末の大形器台を多く伴う点でも、古相を強く残留させている。なお、和泉北部で確認される庄内式土器群の初源は、庄内式甕・小形器台BはII-2式古相、小形丸底土器はII-2式新相、有稜高杯C・布留式祖形甕はII-3式であることから、河内の先進地域の土器組成が極めて先鋭的な動態を示すことが分かる。

庄内式期IIは「尖り底を呈する古相の庄内式甕」を指標とし、庄内式の発展期とされる。伝統的なV様式系甕、鉢が多く残存するが、瀬戸内地方の甕や庄内系甕の影響を強く受けた個体もある。また有稜高杯Cが増加し、布留式祖形甕、有段高杯、椀形高杯が出現する。小形器台Aと小形器台Bが存在する。小形丸底土器は、口縁部の短い鉢状のものである。甕の装飾性が増し、また直口甕が出現する。

和泉北部では庄内式壺の完形品に恵まれず、器形から比較検討ができないが、下田編年の前後関係から下田II-2式古相がほぼ併行すると考えられる。和泉地域では庄内式壺の出現をみると、その存在は稀である。有段高杯、直口壺は、和泉北部でも同じ段階で出現する。しかし量的には僅かな位置を占めるに過ぎず、また外来系土器II類の性格をもつかも知れない。河内で前段階に出現する小形器台Bは、和泉ではやや遅れて本段階で組成に加わる。椀形高杯Bは第V様式からの系譜で存在する。

庄内式期IIIは「やや丸底気味の上膨らみの球形化した庄内式壺」を指標とする。土器様相から第V様式的な要素がほぼ消失し、庄内式の土器様式が定着する段階とされる。V様式系壺は先進地域で駆逐されるが、周辺地域では尖底、丸底化が果たされつつ残存する。高杯は有稜高杯Cが主体となり、有段高杯、椀形高杯が存続する。同じく小形丸底土器、小形器台は継続して存在し、壺では装飾性が薄れ、複合口縁壺の口縁部拡張は強く外傾する。またV様式系鉢が「庄内系鉢」(小形鉢H)に移行する。

和泉北部では庄内式壺の形態から、下田II-2式新相がほぼ併行すると考えられる。壺組成中における庄内式壺の比率が高まり、稀な存在ではなくなる段階である。しかし弥生形壺Aがなおも多量に存在し、あくまでも壺の主体を占めている。弥生形壺Aの体部は下膨れの個体が目立ってくるが、依然として平底への執着は強く、尖底や丸底への積極的な指向はみられない。高杯は伝統的な有稜高杯Aが主体で、Cはまだ出現をみない。鉢も弥生形の系譜が安定的に存続する。従って壺、高杯、鉢などの主要器種には「伝統的第V様式」の様相が強く残され、この段階における河内地域の土器様相とは、もはや顕著な乖離が生じている。一方、河内地域と歩調を合わせるかのような存在が小形器台、小形丸底土器A、有段高杯、椀形高杯Bである。なお和泉北部では、小形鉢Hの出現はIII式まで待たねばならない。

庄内式期IVは「丸底の全面ハケまたはごく細かいタキをもつ下膨らみに球形化した庄内式壺」を指標とする。庄内式壺の製作技法の齊一化、および製作技法が頂点に達する段階とされる。布留系壺は肩部に波状紋、横ハケが施され、口縁端部の肥厚を伴う。また布留系壺は増加するが庄内式壺との構成比は遺跡によって異なり、庄内式壺がなお主流を占めている。中核部ではV様式系壺はほぼ消滅しており、周辺地域で製作された丸底のものが搬入される状況にある。高杯、小形器台は前段階と大きな変化はないが、小形丸底土器は口縁部の発達をみる。複合口縁壺、直口壺も継続し、新たに布留系直口壺、有段口縁鉢が出現する。その他、吉備、山陰、四国、東海産などの搬入土器が目立つ存在となる。

続く庄内式期V=布留式期Iは「完全に近い球形を呈する全面ハケ調整の庄内系壺」を指標とする。庄内式の延長で、また布留式開始期の要素を併せもつ段階とされる。肩部に丁寧な横ハケを施し、器壁の薄い典型的な布留式壺が出現し、布留式壺の増加と共に庄内系壺が減少する。椀形高杯、有段高杯は完全に消滅する。小形器台Bは口縁端部が上方に拡張され、また小形器台Cの出現をみる。小形丸底土器は口縁部が内湾気味に開きながら発達する。有段口縁鉢は前段階と同形態のものが存続している。また搬入土器は前段階と同じく吉備、山陰、四国、東海産のものが目立つ。

中河内の庄内式期IV～布留式期Iには、和泉北部の下田II-3式～III式がほぼ併行すると考えられるが、両者の整合性については検討の余地を残す。

下田II-3式は和泉地域で初めて布留式祖形壺の出現をみ、弥生形壺、庄内式壺と共に壺の構成を三分する。小形器台、小形丸底土器、直口壺、有段高杯など庄内系の土器がそのまま存続し、また新たに有稜高杯Cが出現する。しかし壺では広口壺が残存する他、高杯、鉢などにも第V様式の様相が強く残されており、全体的に弥生以来の技術体系を引きずっている。

下田III式に至って、新たな器種として有段口縁鉢、小形鉢H、小形器台C、複合口縁壺Cの出現をみ

る他、直口壺や布留式祖形甕の盛行など、土器様相が激変する。同時に弥生系の壺、甕、鉢、高杯が組成の主座から退き、第V様式系器種の衰微傾向が顯著となる。

既に述べたように下田III式は萱振遺跡S E03と併行関係を有し、平城宮下層SDに先行する。そして第V様式系・庄内式系の残影を保持しつつも布留式に盛行する器種が出揃うが、細部にはなお不安定な要素を残すことを指標とした。しかし米田は布留式古相の設定を「定型化」した布留式甕に依拠しているので、平城宮下層SDと併行関係にある坂田寺跡下層資料を布留式期Iに置くことになり、下田編年とそれが生じるようである。下田III式では大半の布留式甕が、口縁部を中心として布留式祖形甕と共に特徴を備える。これを溯源的な布留式甕の一群と解し、「定型化」を果たした布留式甕の一般概念とは分離されるべきものであることを強調しておきたい。

以上のように相互比較は細部に検討の余地が残されるが、和泉北部の土器様相の変遷は概ね中河内地域の先進地域と比較して、特に下田II-2式の段階において顯著な後進性を露呈している。しかしこの遅れはIII式に及んで一挙に解消される。編年の細分化が進んだ河内では、布留式の多くの器種が庄内式に溯源をもつことが明らかにされており、米田が設定した「庄内式期V=布留式期I」の時期区分が端的に示すように、「庄内式と布留式の区別が不明瞭」(米田1991)な状況を呈するという。この指摘は、土器様相の最大の画期をIII式に求める和泉北部の状況とは齟齬を來すものであり、こうした編年上の不整合の最大要因は、河内・大和など畿内の先進地域と、和泉など周辺後発地域との間では、土器様相の変遷が必ずしも歩調を合わせていないことにある。

庄内式甕の普及は、中河内に限定しても集落によって差異が認められる(米田1983)と共に、集落によって土器様相に相違の存在する傾向は大和でも指摘されている(関川1988)。このように庄内式様の展開する地域でもその内部構造は等質的でなく、小地域単位での先進的・後進的偏差の存在することが知られている。しかしながらも中河内・大和東南部の特定地域には、新たな土器文化である庄内式様を育み、さらには拡散させたであろう先進的な集落群の存在が求められよう。河内では中田遺跡、小阪合遺跡、成法寺遺跡、大和では纏向遺跡などが想定される。これら先進地の内部では、庄内式様が先鋭的で系統的な発展を遂げ、庄内式と布留式の境界を不分明にする要因を作っている。そして庄内式に属する多くの器種は能動的な動態を示し、周辺他地域の伝統的な土器様式を、結果的に布留式として変質させる強い牽引力を有していた。これに対し保守的体質の根強い和泉地域では、下田II式を以て新たな土器文化の波を受け、爾後、段階的に波及する庄内式の受容・消化によって、伝統的土器様式を技術的根幹に据えながら、徐々に変質が進行するといった受動的な対応をみせた。こうした中でIII式の土器変容の画期は劇的ともいえるものであり、II式まで優勢であった保守性からの脱却を遂げている。

古式土器にみられる庄内式から布留式への転換の画期について、関川尚功は新しい器種への転換が早い纏向遺跡と比べて「そのほかの遺跡ではこのような変化は遅いため、布留式への転換ぶりはむしろ急激なものとなり、その相違はより明確なものとなるはずである」(関川1988)と予測した通り、下田遺跡はまさしく初期畿内政権が誕生した先進地域の縁辺に位置するがために、土器の変革の波が、より明確な形でIII式に表徴されたと理解できる。

第2項 和泉・河内の地理的条件の相違

土器様相の変遷において、以上のように河内地域と和泉地域との間にそれが生じたのは、地理的条件の相違が最も大きな要因と考えられる。Fig.461に大阪府下の下田II式(併行)～小若江北式の主要遺跡



Fig. 461 大阪府下(淀川以南)の古墳時代初頭～前期前半の遺跡分布

分布状況を示した。河内では中河内地域に遺跡が集中するが、この付近一帯には旧大和川が形成した広大な氾濫原が存在する。庄内式期以降、中河内地域の集落群は社会的、経済的に優位な座を獲得するに至った。この地域は瀬戸内沿岸交通路の要衝で、大和へ通ずる門戸という地の利に加え、高い生産性が望める肥沃な沖積平野を擁していたことからも、地勢的に有利な条件が備わっていたといえる。

広大な沃野が開けた中河内に対し、和泉地域の地形は山地・丘陵と海岸線が接近していく可耕地面積が極端に狭いことが特徴で、沖積層は河川流域および海岸沿いの平野として分布するのみである。集落の占地は中河内とは異なって、河川下流域の洪積段丘面上を中心に展開をみせ、一部の遺跡は河川沿いの氾濫原に及ぶも、その数は限られている。従って和泉地域の農業生産性は総じて高水準を期待できなかつたに相違ない。このような地理的条件によって、沿岸部の集落では主たる生業を、いきおい漁獲や製塩活動に頼らざるを得なかったのも無理からぬ経緯といえよう。和泉の農業生産に関して地勢上の限界があったことは、律令時代を経て飛躍的に技術的向上が果たされたはずの平安時代初期においてすら、延喜式に「下国」と記されたことに端的に表されている。しかしながら、生産性の向上と人口増加の均衡が発展的に保たれた時、四ッ池遺跡や池上舟根遺跡が膨張を続けたように、大規模な拠点的集落を育成し得る力をも内在させていたのである。

さて、河内と和泉の遺跡について平面分布を比較すれば、旧国境に沿うように遺跡の存在しない空白地帯がある。この地は石津川右岸一帯に広がる泉北台地であるが、特に台地の末端部の洪積段丘中位面にあたる三国ヶ丘台地、古く「百舌鳥野」と呼ばれた辺りには、我が国を代表する巨大古墳を擁した百舌鳥古墳群が造営されている。ところが台地上の古墳時代集落遺跡は、土師遺跡・陵南遺跡・陵南北遺跡・東上野芝遺跡など造墓に関わったと考えられる集団が遺した遺跡によって占められ、布留式前半までの遺跡は全く存在しない。このような遺跡分布は、少なくとも百舌鳥古墳群で最も古い乳の岡古墳が築造されるまで耕地拡大を目的とした開発の手が及ばず、泉北台地が生産性の見込めない荒野として放置されていたことを暗示する。台地の開発は墓域の設定によって初めて達成されたのである。泉北台地では西端付近で石津川の支流である百舌鳥川、百濟川が小規模な谷地形を刻むばかりで、総延長の長い河川が全く存在しないことから、農業生産に不適な地勢であったことは首肯できる。また泉北台地の東方に視界を転じれば、古市古墳群を擁する羽曳野丘陵がある。羽曳野丘陵周辺の古墳時代集落遺跡分布の動向については、「遺跡立地の状況をみると、古い時期には沖積地(氾濫原)に立地する場合が多く、中・後期になると、段丘上に位置する例が多くなるとの指摘があり(中川1991)、三国ヶ丘台地における遺跡の状況と符合する。すなわち三国ヶ丘台地と羽曳野丘陵は集落近郊に位置する一定面積を備えた低い台地で、しかも造墓活動が農業生産に干渉しない不毛の地であった。こうした地理的条件は、百舌鳥・古市古墳群の墓域の選択に際し、決定的な影響を及ぼしたに相違ない。

布留式前半期までの集落分布が示すように、和泉と河内の間に横たわる泉北台地は、両地域の水系を分かつと共に地形を隔離し、下田II式(併行)期までの土器の動態差に代表される如く、文化の一側面の相違を生じせしめている。大阪湾に面した和泉地域では、もうひとつの交通路である海路の存在も忘れてはならないが、少なくとも陸路には明らかに地形的制約があった。下田遺跡と最も近距離の河内の遺跡は、学史的に著名な上田町遺跡である。上田町遺跡は河内では辺境に位置し、もとより大和川水系の先鋭的な動向を担った集落とは考えられないが、比較検討のために下田遺跡との直線距離を測ると8.75 kmの数値が得られる。和泉地域では主要水系において、遺跡相互間は0.5~2 km前後の距離で分布するから、これと比べれば遠隔と言えなくもない。しかし現代感覚からみれば、集落相互に社会的隔絶を生

み出すほどの距離とは考えにくく、しかもその間には標高20~30mばかりの低い台地が横たわっているに過ぎない。この点について、当時における集落間の距離は、実質的な長さというより、むしろ水系を軸とした集落相互の緊密度、換言すればその集落が属する河川ごとに結ばれた社会的紐帯の強弱によって、決定されたと解することができる。いわば社会的な距離感として測られたのであろう。そして中河内では各河川を下流に辿るといずれも等しく河内湖に達するが、和泉では河川ごとに分割されて大阪湾へ達し、遂に一ヵ所に合することがない。いずれの水系に属する集落が、政治社会的に鍛磨され得る地理的条件を備えていたかは自明であろう。泉北台地はその稜線の東西で、大和川・石川水系と、和泉山脈から発する諸水系とを分離し、河内と和泉とを地理的、社会的に分かつ結果を導いた。歴史的には遙か後のことになるが、河内と和泉の国境が泉北台地上に置かれた事実は、律令時代の段階に至ってもおよそ台地の稜線を境に、依然として画されるべき社会的な隔たりの存在したことを雄弁に物語る。

第3項 下田I・II式の地域社会

古墳時代初頭から前期にかけて、石津川水系においては下田遺跡を最大として、周囲に石津遺跡、船尾西遺跡、四ヶ池遺跡(第83地区)などが群在する。これらの一派からやや離れた中流域では中小規模の小阪遺跡、大庭寺遺跡が占地するが、いずれも生活基盤を同じく石津川水系に依存しているので、やはり下流域の遺跡群とは有機的な関わりをもつ遺跡であろう。大津川水系では豊中遺跡を最大として、七ノ坪遺跡、池上曾根遺跡(第2地点)などがその周囲に営まれている。さらにこれらの周辺には府中、上町など中小の遺跡が分布し、やや南下した大津川下流域には、西大路遺跡、和氣遺跡といったやはり中小規模の集落が点在する。海浜部では羽衣砂丘遺跡、脇浜遺跡、湊遺跡などの漁業生産的性格を有した小規模遺跡が点々と営まれ、また泉南地域においては大久保遺跡の存在がみられるが、総じて分布密度は稀薄で、核となる集落の存在を認め難い。

以上の遺跡の分布状況から、和泉地域の当該期集落の存在形態について次のような類型化が可能である。すなわち石津川水系には下田遺跡、大津川水系には豊中遺跡を核とした拠点的な2大集落が形成され、その周囲に中小集落群が水系を軸に分布する。これらの圏外には、散発的に点在する比較的小規模な集落群があり、これらの中には海浜部に立地し、漁業生産活動に従事した集落も少なくない。

当該期における泉北平野の遺跡の動向については、石部正志が池上曾根遺跡を中心とした地域史の中で触れており(石部1977)、泉北平野の遺跡は弥生後期に一時衰退現象が認められることから、高地性集落の観音寺山遺跡や懸ヶ池遺跡への地域共同体員の集住を想定する。弥生終末期以降の集落は再び平地に帰り、他地域より遅れつつ数を激増させるが、その頃には池上曾根遺跡自体は規模を縮小させて拠点集落としての性格を失い、一般の集落群として解消する。そして和泉平野の首長たちは、方形周溝墓にみる後進性を保持しながら大和などの大首長と連携をもち、地域共同体の全権能を掌握して平野部の開発を進めたとしている。また坪之内徹は大久保遺跡を中心に、和泉南部地域の当該期の政治社会について分析を加えている(坪之内1996)。上田町II式甕など庄内式を出土する遺跡は、拠点集落である四ヶ池遺跡に比較的多いが、池上曾根遺跡と周辺遺跡では伝統的第V様式が優勢な中にあって、上田町II式甕の多い豊中・古池遺跡を特異な様相と捉え、少なくとも庄内期前半での池上曾根・七ノ坪・豊中古池・府中の各遺跡の地域的なまとまりを指摘している。そして和泉地域で伝統的第V様式が優勢な状況と、前期古墳や墳丘墓の存在しない墓制との間の関連を説き「古墳時代初頭の熊取地域の社会が広範囲な地域間交流の結果として生ずべき墳丘墓・古墳を生み出すまでには成長していかなかった」とした。

石部は弥生中期末から拠点集落の解体と高地性集落への移動、さらに弥生終末期には平野部の一般集落としての展開を指摘している。一方、坪之内は弥生時代中期以降の拠点集落の断絶を特に指摘しており、また庄内式窯の出土量の多寡を遺跡の性格に帰結させようとした。墓制の上での伝統性、後進性は両氏の指摘する点である。

これらの先行研究を参考しながら、下田遺跡で得られた知見より検証を行い、当該期における和泉の地域史の構築を試みたい。衆知の如く和泉の地には、弥生時代中期まで地域を二分して君臨する四ヶ池遺跡、池上曾根遺跡の拠点集落があった。畿内各地において発展を続けてきた弥生集落が、中期末から後期前半にかけて解体し、第IV・V様式の土器の間に断絶の介在する事実はよく知られている。そしてこの断絶は、和泉地域においても例外とはなり得なかった。四ヶ池遺跡、池上曾根遺跡では、中期末から後期前半にかけて、規模を縮小しつつ集落の一部を残すが、主体は立地を大きく変える。

和泉地域では共に和泉市域に所在する信太山丘陵上の惣ヶ池遺跡(石附1966)、横尾川流域の観音寺山遺跡(観音寺山調査団編1969)が大規模な(準)高地性集落として周知されており、いずれも弥生時代後期前半を主たる経営時期とする。立地的にみれば惣ヶ池遺跡は池上曾根遺跡の東、すなわち後背2km余の信太山丘陵に占地することから、池上曾根遺跡で膨張を続けた人口は、この遺跡の成立によって吸収されたと考えるのが妥当である。一方、観音寺山遺跡は直線距離で池上曾根遺跡の南東4kmの地点に位置し、立地面では大津川水系をやや廻って水系の主流をなす横尾川、及び松尾川に挟まれた幅の狭い段丘上にある。すなわち観音寺山遺跡は、信太山丘陵前方の段丘面に依存した池上曾根遺跡とは地形的に隔絶されており、両遺跡に直接的な関連を求めるには難がある。このことから観音寺山遺跡の成立を、岸和田市域の山直地区をはじめとする中規模集落遺跡群に求める見解がある(石部1979)。

このような状況に対し、石津川水系に属する四ヶ池遺跡の動態はよく解明されていない。石津川水系の後期前半の遺跡には、中流域段丘上に展開する昭和池遺跡(土山1993)、伏尾遺跡(岸本・岡戸編1990)、野々井西遺跡(西口1994)などあるが、いずれも小規模で土器量も少なく、流域における大規模な後期前半の集落遺跡は知られていない。しかしながら、台地上における四ヶ池遺跡の集落規模が急速に縮小した以上、集落人口の受け皿となった遺跡が、いずれかの地点に存在する可能性は捨てきれない。池上曾根遺跡と惣ヶ池遺跡の対応関係は典型的なモデルとして捉えられるものであるが、水系をはじめとする地域支配構造を軸に据えながら、この時期に高地性集落の形成が行われたのであろう。

和泉地域での高地性集落は、およそ弥生時代中期末から後期前半の限られた時期に経営され、後期前半を以て主だった高地性集落は解体し、再び移動した形跡がある。従って高地性集落解体後の動態は、後期後半期以降の遺跡によってはほぼ示されるとみてよい。石津川水系においては、後期後半に集落規模を縮小させて四ヶ池遺跡が継続する他、同じく下流域に下田I式の下田遺跡、鶴田町遺跡が出現する。さらにII・III式の段階には下田遺跡の継続と共に四ヶ池遺跡(第83地区)の形成をみ、またIII式には船尾西遺跡、石津遺跡が営まれた。大津川水系右岸段丘上では、池上曾根遺跡が集落自体の規模を縮小しつつも命脈を保っており、四ヶ池遺跡と同様の状況を示す。また後期中葉から後半にかけての時期と、下田I式の段階に府中遺跡が営営される。下田II式には池上曾根遺跡(第2地点)、府中遺跡、豊中遺跡、古池北遺跡、東雲遺跡などが形成され、またII・III式にまたがって七ノ坪遺跡が営営されている。

石津川水系と大津川右岸において、新たに出現する集落群の位置は、弥生中期の二大拠点集落の立地と、それぞれ近接しつつも重複せず、その周囲に形成されるという特徴がある。すなわち前者は台地上の四ヶ池遺跡を取り囲むように北・南・西側に近接して占地し、後者は池上曾根遺跡の縁辺部、西方、



Fig. 462 四ヶ池・池上曾根遺跡周辺の集落分布

あるいは隣接して南方一帯に群在する(Fig.462)。こうした集落の動向から、弥生時代中期段階で低地部にあった拠点集落が、後期前半には高地性集落に姿を変えて存続し、後期後半以降は再び低地部に回帰した実態が窺え、さらにその集落の立地は、あたかも中期の拠点集落を意識したかのようである。

遺跡の内容をみると、庄内式壠の出した搬入量を誇る豊中遺跡、方形周溝墓群が営まれた七ノ坪遺跡など、下田遺跡を含め和泉地域では他の中小集落群を圧する規模をもつ。また府中・豊中・古池北・七ノ坪の各遺跡は、経営時期も占地の位置も接近していることから、個々を分離して異なった集落群とせず、これを統合して一集落の広がりや時代的変遷と解しておく。従ってこれらの遺跡群の実態は、さらに拡大された規模となる。なお、II式の上町遺跡、東雲遺跡もこれらから派生した分村であろう。

以上のように、下田遺跡、豊中遺跡を核とする二大勢力の源流については、立地と規模の所見および高地性集落の消長から、弥生中期段階の拠点集落からの系譜に繋がるものと見なして矛盾はない。すなわち、下田遺跡など石津川下流域の集落群は四ッ池遺跡を、豊中遺跡など大津川下流域右岸の集落群は池上曾根遺跡を、それぞれ母胎として成立したと理解しておく。これらの見解を踏まえ、弥生中期からの勢力を継承し、後期後半以降に再構築されて古墳時代前期に継続する遺跡群を限定的に包括し、前者を下田遺跡を標識として「下田遺跡群」、後者を豊中遺跡を標識として「豊中遺跡群」と呼称する。これら両遺跡群は、集落の再構築の時期や立地が、歩調を合わせるかのような一致をみせる。

これら遺跡群の内部構造については、七ノ坪遺跡におけるII~III式段階に継続する方形周溝墓の墓制にみられるように、その被葬者の系譜が伝統的な共同体首長層の延長に位置することが、暗に示されている。従って、再び父祖伝来の故地に生活基盤を築いた集団は、弥生時代以来の本貫勢力そのものか、あるいはその流れを汲んだ本貫に近い集団だったであろう。このような集落の消長から、和泉における弥生集落構造の一時的な解体が内在的要因によるものではなく、広域に及ぶ社会的緊張の高まりなど、抗し難い外的要因によって惹起された結果と見なされ得る。ここに想定される社会的な激変は、弥生時代を通じて潜在的に力を蓄えながら成長し肥大化した各地の勢力が、あるいは同盟を結び、あるいは対立して引き起こされたと考えられ、次の古墳時代の政治的動態を方向づけるに重要な意味合いをもつものであった。しかしI式の段階における下田遺跡群、および豊中遺跡群にみられるような集落の低地部への回帰は、他地域の状況も含め、中期末以降の緊迫した社会情勢に何等かの雪解けの訪れを示すものと捉えられる。そして緊張関係の緩和を契機として、少なくとも和泉の地域支配構造に関しては下田・豊中両遺跡群が、それぞれ伝統的な勢力圈を再構築したかにみえる。従って拠点集落の内部構造は中期末で解体したのではなく、後期以降においても緊密な結合関係が温存されていたのであろう。これら拠点集落とは異質な構造と考えられる遺跡が、観音寺山遺跡である。観音寺山遺跡も懃々池遺跡と同じく後期後半には姿を消すが、その出現以前と共に、消滅後の様相がいまひとつ不明瞭である。高地性集落の段階を挟む前後に、母胎となる集落の存在が稀薄であり、四ッ池・池上曾根両遺跡の拠点集落構造とは、存立する集落形態が異なっていたのであろう。解体後の集落動向については、大津川水系に直接依存する点からみて、下田I・II式の西大路遺跡、II式の和氣遺跡が、観音寺山遺跡の流れを汲んだ後裔の遺跡と見なし得る。しかし集落規模は下田・豊中両遺跡群と比べてかなり小さく、中小規模の集落として分布したようである。

河内地域における庄内期諸集落の動向については、中河内では弥生時代の拠点集落と庄内式期集落とは位置的に重ならず、「弥生的な集団関係の崩壊」が見出せ、「また庄内期以降の集落はその範囲に点在した弥生小集落を核として発展したとは考えにくい」という山田隆一の指摘がある(山田1995)。この

ようには河内地域では古墳時代初頭に至り、新たな政治的統合へ向けて一連の動向があったものと想定され、そこにはむしろ前時代的な紐帯からの脱却の意図すら窺える。そして結果的には大和や河内の政治的動態が時代を牽引していくことになるが、この時期に形成された主要集落の動向が、河内と和泉とでは全く異なっている点は注目に値しよう。前述の如く、一旦解体するかにみえた和泉地域の拠点集落は、後期後半から庄内式併行期にかけて再編の道を選択した。またその地域支配構造にも大きな変革は生じることなく、保守体制への根強い執着ぶりが窺える。このような旧態依然とした古い体質が、下田II式の保守的な「伝統的第V様式」土器群として、日常生活土器に反映したと見なすことも可能であろう。

庄内式(併行)期以降、広範に及ぶ土器の移動を通じて、背後に人的交流という社会現象のあったことが認められている。こうした背景のもと、和泉地域でも陸路、あるいは海路を経由してであろう外来系土器の搬入が徐々に目立つ存在となり、保守的であった下田II式の在来系土器群相にも影響を及ぼさずにはおかなかつた。以下、下田I～II式の外米系土器について若干の見解を述べる。

下田遺跡の外米系土器I類の出土点数は、全般的に多くはない。その中でも出自を明らかにできた個体は僅少である。外米系土器の認定は、器形・調整・焼成・胎土・色調・質感等の諸属性、あるいは全体において、在地のものとは異なる特徴を備えた土器について行った。一部の土器は胎土砂礫分析を実施したが(分析篇第6章)、その観察結果から導かれた土器の出自は、考古学的観察に基づく所見と必ずしも一致するとは限らなかった。従って両者の整合性についてはまだ課題が残されている。

弥生後期の下田I式では、外米系土器I類は極めて少ない上に、出自の明らかでない個体がほとんどである。交易などを通じて、しかも偶発的な要因で集落内に土器が流入する様子が窺える。

II-1式に属するS D1305(4層)からは壺X(370)、有稜高杯X(407)、東海系の台付壺(477・478)など、少數の外米系土器I類が出土したに過ぎない。壺X(370)は、器形や内面ケズリ等から瀬戸内沿岸地域、高杯X(407)は、器形や外面調整のミガキBの存在から吉備地方との関連を推定しているが、砂礫分析では前者が北摂(?)、後者が河内の石川との結果を得た。上限を下田II-1式、下限を下田II-3式とするS D1305(3層)からは、東海系の瓢形壺、近江系の受口状口縁壺が出土した。瓢形壺(485)は最大径を体部下半にもち、口縁端部を丸くおさめるので、廻間II式の範疇で捉えられるであろう。受口状口縁壺(490)の口縁部は強く屈曲し、体部を粗くハケ調整した後、肩部に横方向の条線を施した有紋の個体である。近江古墳様式1～2様式に比定できよう(植田1994)。また上限をI-4式、下限をII-2式とするS A2218中・上層出土資料中には、丹後・丹波系の器台Xがある。この器台X(1418)は、外傾する口縁部外面に擬凹線を巡らせたもので、丹後・丹波V-4様式に相当するとみられる(石井1989)。一般的には庄内式(併行)期以降、地域を超えた土器の交流関係が活性化する。しかし以上にみたように、下田II式における外米系土器I類の搬入状況は特に目立った増加傾向を示さず、また在来系土器群の存在形態に干渉するものではない。

I類がこのような消極的な流入状況を示すに対し、外米系土器II類とした庄内式土器群の動態には注目すべきものがある。庄内式土器には直口壺A、複合口縁壺B、庄内式壺、有稜高杯C、楕形高杯B、有段高杯、有段器台、小形器台A・B、小形丸底土器Aなどがある。これらは弥生土器からの直接的系譜を辿れるものが多く、和泉における楕形高杯Bのように、弥生土器と厳密な線引きができない場合もある。これらの庄内式土器群のうち、外米系土器II類として集落に持ち込まれた土器の他、これらを手本に在地で模倣された土器であろうが、庄内式壺を除いて両者の識別は困難である。ただし断定はしかねるが、その中でも器面調整にミガキBを有する土器が外米系土器II類の可能性をもつ。ミガキBは吉

備地方に起源をもち、畿内の在来技法に対する外来要素として捉えられるからである。そしてこの技法は、庄内式の多くの器種の調整法として攝取され、一部は布留式へと継承されていく。和泉の下田II-1式段階では、ミガキBを有する土器は外系土器I類の有稜高杯X(407)以外に存在しない。しかしII-2式以降には、ミガキBをもつ土器が少數ながら出現し始める。しかもミガキB調整は、下田II-2式では有段高杯(664)、椀形高杯Bの小阪[201-701]、II-3式では有稜高杯C(608)、有段高杯(611)、小形丸底土器A(617)、小形器台B(622)など、庄内式に属する土器に集中してみられるのが特徴である。これに対して在来系土器I類の有稜高杯Aや鉢類には、弥生以来の伝統的なミガキA技法が頗るに用いられている。從って少なくとも和泉地域において、基本的にミガキB技法は庄内式土器の普及に伴って浸透した調整法であったと考えられる。庄内式土器でもハケ調整に頼った個体があり、またすべてが搬入品とは断定できないが、その多くは外系土器II類であったことが推測される。なお、(608)・(611)・(617)・(622)の出自に関しては、砂礫分析により河内平野の結果を得た。

II-3式の甕組成は、布留式祖形甕が加わることで新たな変成の兆しをみせる。布留式祖形甕は庄内式甕Aと異なり、胎土や色調からその出自を即断できない。砂礫分析ではこの段階の布留式祖形甕について、SW1363資料では(603~605)が加賀南部、(606)が和泉北部、SD2254資料では(1515)が加賀南部、(1516)・(1518)が和泉北部との結論を得ている。すなわちこの分析が正しければ、加賀南部からの外系土器I類と、それを在地で模倣した受容土器I類とが、組成を二分していることになる。

次に庄内式甕の和泉での存在形態について若干掘り下げてみたい。庄内式甕は庄内式土器中で、群を抜いて搬入量の多い器種である。その成立については、畿内第V様式的タキ技法と、吉備の内面ヘラ削り技法との相互交流の結果とする見解が述べられて久しいが(都出1974)、発祥の経緯はなお未知の部分が多い。庄内式甕は、端的にいえば徹底して熟効率の向上が追求された器種である。体部壁面の厚みは最も薄い部分で1~2mm程度であり、その製作にあたっては高度に熟達した内面ケズリ技法が駆使されている。また製作地が比較的限定されるにも関わらず広い分布圏をもつとも大きな特質で、大量消費を前提とした庄内式甕の生産構造を窺うことができる。すなわち庄内式甕は、弥生系技術を下地の一部にもちながら、中部瀬戸内地域の技法を積極的に攝取し、これらを発展昇華させた高度な技術によって生産されており、加えて広範な分布範囲をもつ画期的な土器であった。こうした土器生産の背後には職業的な製作集団の存在を疑い不得、当然ながらその共同体内部では生産部門の専業分化が進行し、他の構成員がこれを支援する体制も整えられていったであろう。さらにその生産、流通の背景には相当の計画性が窺え、直接的生産集団と密接な関わりをもつ政治主体の存在を想定せざるを得ない。その政治主体はおそらく初期畿内政権の萌芽的な前駆組織、あるいは政権そのものであり、少なくとも庄内式甕にかかる土器生産構造は、複数共同体間での機能分化の結果として組織されたものとみなしえる。

庄内式甕の生産、流通の基盤や契機などは、現状では政治的動向と直結させる見解が主流となっている。たとえば酒井龍一は「庄内式の甕を統率化された土器製作の専業集団が製作した土器と認め、その生産-運搬-消費の一連が社会的に管理されていた可能性」を指摘して、弥生時代末期に開始され、やがて古墳造営に結実する大規模な労働管理の一環として捉えようとした、煮沸用甕の数的、質的な発達に強い政治性を投影している(酒井1977)。庄内式甕の動向は政治性とまったく無関係ではありえない。これは確かであるが、たとえば鉄器や塩業に関わる技術や生産物が、戦略的側面を濃厚に備え得るのは首肯できるにしても、庄内式甕に戦略物資としての機能を果たして期待できただろうか。庄内式甕が極めて実用的で、利便性の高い道具であったことは否めない。しかしその反面、生活上の必需品たりえない

ことも自明である。旧来の煮沸容器と比べて、この種の甕が備える卓越した機能は、特殊技能者集団の手によって優れた煮沸効率という属性が与えられた点に集約される。従って間接的には、燃料の効率が飛躍的に向上する効果が得られる。一般的な集落構成員にとって、この性能は技術上の制約から模倣困難な付加価値として捉えられたはずである。すなわち、いわば特産品としての位置づけを想定することが可能で、庄内式甕の製品自体に伴う交換価値も、自ずと大きいものであったに違いない点を重視したい。このことから、都出比呂志が庄内式甕について示したような「容量も規格的で、精巧に作られた優良品が、河内から他地域に一方的に動いていることを重視すれば、土器そのものが商品化している可能性は高い」(都出1989)という見解に妥当性が見出せる。庄内式甕に「商品」としての側面を考慮すれば、生産主体とは異なった共同体に所属する種々の農海産物、手工業生産物、あるいは地方的な特産物などとの直接的交換の手段として、これを用いることができたであろう。またさらに庄内式甕の流通網の確立を通じて、何らかの政治経済的活動が行われた可能性を考慮する余地も生じよう。少なくとも上記のような庄内式甕の生産体制およびその流通を通じ、政治主体にとって有益な知識と経験が蓄積され、後に続く布留式土器の生産その他の動向に、少なからず影響を与えたものと思われる。

さて、下田遺跡で出土した庄内式甕は、III式では播磨產と推定されたBが加わるが、II式段階ではすべてA、すなわち上田町II式甕と呼ばれる河内型庄内式甕である。四ッ池遺跡第83地区古墳時代河川からは、大和產かとされる矢羽根タキをもった庄内式甕が出土しているが、和泉地域全般に大和型庄内式甕の存在は極めて稀である。従って少なくとも下田II式段階における庄内式甕は、河内地域からの一元的な供給に依存していた。

庄内式甕の系譜上で先行する資料として、下田II-1式に比定したSK2245の弥生形甕X(1740)がある。(1740)は胎土に角閃石を含む生駒西麓産の搬入土器で、形態・調整の諸特徴に庄内式甕の萌芽的様相を備えており、庄内式甕の先駆形態を示す資料として注目される事例である。下田II-2式以降、和泉地域ではTab.46に示した諸遺跡から庄内式甕の出土が知られている。生駒西麓域の生産中枢で庄内

Tab. 46 和泉地域の庄内式甕出土遺跡

遺跡名	所在地	出土遺構・層位名	文獻	遺跡名	所在地	出土遺構・層位名	文獻
下田遺跡	東大阪市下田町	略	本宮	古佐渡跡	東大阪市穴田	第1地盤 反黃色砂質土	阪口・佐藤・鶴山1981
古ノ佐渡跡 82-1地盤 第3地区	東大阪市守口町守口 守口長守町守口町守口	第1層 SA-01住居址 K-14-5 P 窓込み上面台合板 上部断面 第4合合層 第3合合層 古墳時代用具	北野1977 種口・土山1984	古佐渡跡	東大阪市守口町	大溝	石津・鶴井1978
				東佐渡跡	東大阪市東守口町	溝-1	種口1976
				守口遺跡	守口市守口町	第1次調査 1号住居	阪口1976
				上町遺跡	守口市上町・太町	「井戸」状遺構	阪井・酒井1975
				和気遺跡	守和田市和気町	聖穴住居址 SK-01 SK-07	久米1985
				土生遺跡	守和田市土生町	A地区・溝 C区・黒褐色土中 - 土坑4	岸和田遺跡調査会編1975a 岸和田遺跡調査会編1975b 近藤・尾谷・酒井1976 近藤利由1977
船岡西遺跡	守和田市船岡町西	SG-001 戸戸	種口1979				
船上菅原遺跡	守和田市船上町	-	大阪文化財センター編1979	船岡遺跡	貝塚市船岡	80-O E 91-O 胃部 中州付近	大阪府埋蔵文化財収蔵会編1986
七ノ坪遺跡	守和田市北守田町	第2地点跡-1	種口・黒井・鶴山1982				
舟ヶ瀬遺跡	守和田市豊中町 守和田市東豊中町	「河川」状遺構 第1地点ピット15 第1地点ピット18	豊中・古佐渡跡調査会編1976 阪口・原島・黒木1990	名越舟ヶ瀬跡	貝塚市麻生中	SD-3 下層	農耕1969
				大久保遺跡	東大阪市施設町大久保	浅路	岸・内1996

式壺の生産体制が強化され、その流通網の拡大が図られるに及び、隣接した和泉地域では下田II-2式古相段階で庄内式壺が出現する。出現段階にあって、和泉地域の人々は初めて庄内式壺に接し、その利便性を知ることになった。しかしその存在はまだ稀であり、流通の絶対量が少ない段階として捉えられる。上町遺跡、府中遺跡などがこれに相当する。これに続く新相では、庄内式壺は組成上でかなり目立つ存在となり、かなり顕著に第V様式の様相からの離脱が果たされる。下田・豊中・小阪の各遺跡では庄内式壺が壺組成の20~30%を占めており、和泉地域での流通圏が確立されて恒常的供給が軌道に乗ったことを暗示する。このように、遺跡における庄内式壺の出土量の多寡については、遺跡の経営時期に関わる側面を考慮に入れる必要がある。

さてII-2式新相からは庄内式壺の普及に伴い、これを模倣した弥生形壺Bが出現して組成に加わる。しかしこの器種は占有比率が極めて低く、また技術水準もオリジナルに及ぶべくもない。すなわち壺組成中でもII・III式を通じて特に顕在化した器種とはなり得なかった。和泉地域において庄内式壺はあくまでも外來系土器としての搬入形態が基本であり、それが在来の弥生形壺の器形に影響を及ぼすことはあっても、本質的には受容土器として昇華されなかった。和泉と同じく河内に隣接した東摂では、庄内式壺が弥生形壺にも影響を与え、また庄内模倣壺が積極的に製作された状況(森岡1991)に照らし、和泉地域とは大きく乖離した対応を示している。和泉の地においては庄内式壺の模倣に消極的で、いわゆる模倣壺が広く普及しなかった。その主たる理由は、おそらく熱効率性能の向上に不可欠な内面ケズリ技法が高度かつ排他的であり、在来系技術の延長では模倣できなかった点に帰結しよう。従って効率的な煮炊形態の追求は、専ら庄内式壺の供給に頼らざるを得なかつたのである。しかしながら最も重視すべき事象は、庄内式壺に代表される庄内式土器の受容やその影響が、畿内中枢の周辺地域においてすら、必ずしも足並みを揃えていない点にある。すなわち各地域ごとの受容形態の偏差は、地域社会を構成する集落群が、なお強い地域性、独自性をそれぞれ保持していたことを示唆する。

第4項 下田III式の地域社会

まず、III式段階の下田遺跡の景観を復原する。1988年度の下田遺跡調査団の調査では、今回調査区のおよそ北側に位置する第1調査区で、「河道1」が検出されている(下田遺跡調査団編1990)。河道1は石津川の旧流路とされ、多量の古式土師器や木製品が出土した。下田遺跡III式段階の中心的遺構である大溝S D1108と、河道1との直線距離は50mに満たない至近距離にある。また遺物相も全く同様であることから、この両者が連続する同じ溝の一部であることに疑問の余地はない。従って両遺構での出土資料は、ほぼ同時期に下田遺跡の集落内で保有されていた遺物群と解される。ただし蛇行するS D1108の流路は西南に向いていたようであるが、河道1は北東方向に向かって流水したと考えられている点が相違する。双方の見解が正しいものであるなら、S D1108と河道1とは、北上する一条の本流から検出地点の南方付近で、それぞれ分岐したと考えざるを得ない。従って本流は、東へ河道1、西へS D1108とU字状に分岐することによって、その間には舌状に張り出した中州が形成されたはずである。その幅は数十m以上に達し、この区域を生活空間としてIII式に帰属する下田遺跡の主体をなす集落が展開したと考えられる。調査団では古墳時代前期に属する2棟の方形堅穴住居(住居址1・9)を検出しており、これが下田III式の所産とすれば、今回の成果であるS A1313を含め、3棟の堅穴住居の存在が知られることになる。また当該期の掘立柱建物の存在は遺構の上から確認できなかったが、S D1108出土木製品には高床建築の梯子が含まれているので、堅穴住居と共に高床倉庫等の建物が存在したことは確実であ

る。しかし全般的にみて竪穴住居は、豊富かつ多様な遺物群とは不釣合といともいえる散漫な分布状況を示し、また同一建築物の建替え事例以外では、住居の切合い関係を一切認めることができない。従って住居の分布密度から判断する限りにおいて、Ⅲ式として認識した段階は、さして長期に及ばない時間幅の中に収束されることを窺わせる。またこうした竪穴住居群を、卓越した首長層の居宅に比定するには、かなりの無理がある。従って、これらは農業生産や手工業部門に重点を置いた共同体のものであり、大溝で画された空間に、竪穴住居や高床倉庫が緩やかな分布をみせる景観が復原されよう。そしてこれら諸機能を統括した首長層は、集落を眺望し管理できる別地点、例えばかつて四ヶ池遺跡の集落が立地した三光台地などの高台に、居を構えた可能性も皆無ではない。

次にⅢ式土器群の動向を整理してみよう。下田Ⅱ式、すなわち庄内式併行期の段階では、外来系土器Ⅱ類に刺激されつつ、弥生時代からの緩慢で自律的な変容を遂げるのが、在来系土器の変遷の基幹であった。そこには第V様式の系譜下にある伝統技法が濃厚に温存されている。これに対してⅢ式では、布留式土器組成の成立が最大の画期をなしており、その組成と共に製作技術体系はⅡ式段階と断絶する。総体的にみれば、これまで立ち遅れていた土器様相が、先進地における最先端のそれと一緒に肩を並べ、伝統的第V様式はただ残影としてのみ存続する。すなわちⅢ式土器群の主体は、それ以前と系統の異なった高度技術の導入によって成立をみたことが窺える。

胎土砂礫分析の実施範囲内では、直口壺と複合口縁壺Cについては和泉北部の他に播磨産、また布留式粗形甕と布留式甕については和泉北部の他に加賀南部産が、それぞれ混在するとの結果を得た。このように一部に搬入土器の混在を認め得るとしても、消費効率からみておそらく土器の多くは集落内で調達されたもので、また下田遺跡群に属する近傍集落から供給を受けた可能性もある。いずれにせよ、下田遺跡を核とする地域共同体内で製作された土器の比率は高かったであろう。下田遺跡の共同体内部においては、Ⅲ式段階で新たな土器製作技術が獲得されたことに伴い、それまで固守してきた伝統的な土器作りの体系がほぼ放棄された。これら根幹に関わるほどの水準で土器製作の技術体系が転換した背景には、それなりの必然性を求めるべきであって、単なる流行や模倣として看過すべきではない。

土器製作技術の変容は、具体的には作り手による知識の吸収、および実技の獲得により達成される。前段階と連続しない急速な技術転換の解釈には、Ⅲ式段階における布留式土器の製作工人、あるいは工人集団の介入を想定せざるを得ない。こうした知識伝播の実態としては、下田遺跡への専業的工人の一時的もしくは永住的な移住、あるいは集落の構成員による集落外部での技術習得などの過程が想定される。下田遺跡群に属する集落など、在地の人材が土器製作に携わったことは、1個体の調整において、弥生系のミガキAと、土師器系のミガキBが混用された小形器台B(999)などの存在に暗示されている。なお、小形丸底土器と有段口縁鉢は、調整法に平滑技法を主体とする群と、ミガキBを主体とする群に大別され、また後者に精製品の比率が高いことは既に述べた。また小形器台はミガキA主体と、ミガキB主体のものにおよそ二分できる。すなわち器形を同じくしながら、素地の選択と調整法が異なる二系統が存在し、また器種の相違を超えて同様の分類ができる。現状では推測の域を出ないが、このような製作技法上にみられる系統の相違が、その製作集団の系統差を体现している可能性はある。

さて、Ⅲ式では庄内式甕が減少しながらも組成中に留まり、布留式粗形甕や布留式甕と直ちに置換されるわけではない。しかし庄内式甕の中での組成は前小様式から大きく変化し、庄内式甕A : B ≒ 1 : 2の比率関係が構築される。庄内式甕Bの示す高い占有率、すなわち量的な増加は、布留系の甕に圧されて急速に衰退する庄内式甕Aの減少を補うかのようである。従って庄内式甕Bは、衰退に向かうAと

は異なる流通経路で集落内にもたらされたのであり、Bが正しく播磨産の庄内式壺であったとすれば、和泉と播磨が独自の海上ルートを確保していた可能性もある。庄内式壺Bの量的な優勢の背景には生産量の増加が窺えるが、このような動向は「布留式」の段階ではおよそ先鋭的なものとは見なし難く、むしろ時代の趨勢から取り残された状況を端的に示す現象として捉えるべきであろう。

外来系土器I類は、II式までの段階と比べて量的に増加するが、その存在が全体の土器組成に大きな影響を及ぼさない点においてII式以前と本質的な相違は見出せない。これらのうち出自の明らかな個体は限られたものである。胎土砂礫分析では壺に關し、複合口縁壺Xの(826)は播磨、(868)は阿波、III式に属するS A2220上層の(1579)は阿波との結果を得ている。肉眼観察による所見では小形壺と小形の複合口縁壺Xにおいて、外来系土器I類の占有比率が高いようである。壺では加賀南部に比定された布留式粗形壺、布留式壺、および東海系のS字状口縁台付壺以外は、器形や肉眼観察の所見によれば在地産の個体が多くを占めると見なしておきたい。高杯では高杯Xの(986~988)が器形、胎土とも異質で、外来系土器I類と見なし得る。しかし胎土砂礫分析では(988)が砂礫少量で区分不能、(986)が和泉北部との結果が提出された。和泉北部とされた(986)は、器形の相違に加えて肉眼観察では明らかに発色や質感において、和泉地域の在地系列のものとは異なる属性を備える。こうした判断は器内の粘土質部分の特性から経験的に得られるものであるが、砂礫分析の方法では含有砂礫が微量か、もしくはその検出が不可能な場合には、出自の特定は困難である。この点において、現状では精製器種など、素地の組成によっては手法的な限界が生じることは否めない。

布留式土器の器形が布留式前半期に統合され、型式学的な頂点を極めることは既に述べた。そこには東大寺山古墳の滑石製模造品に示されるような小形器台、小形丸底土器のセット関係からなる祭祀形態を軸に、有段口縁鉢、直口壺、布留式壺など、器種ごとに安定した土器意匠の定着を図る動きが看取される。こうした傾向は、小林行雄が小形丸底土器の広域的類似性を指摘して以来(小林1934)、早くから土器のもつ「齊一性」として認識されてきた。微視的には地域偏差を有するが、畿内を中心とする広域的な古式土器の統合が大局的に推し進められたのは、当時の社会においては布留式土器を、より高次に位置づけようとする意識の表れと見なすことができる。小形器種祭祀は初期畿内政権が依拠した宗教的側面のひとつである。そして政権傘下の首長層が祭祀形態を共有することで、宗教觀にも共通の規範が形成されていたに相違ない。布留式土器のもつ「齊一性」はこうした祭祀形態を中心として、政権内部の結合関係をも土器の文化的側面から象徴するものであった。以上の観点から、下田III式でみられた土器の動向について、その背景に何らかの政治的意図の介入を想定せざるを得ない。

専門の工人、あるいはその知識に基づいた土器製作集団を想定することにより、その製作が集落内の消費活動を単に満足させるに留まらず、土器の大量生産、ひいては下田遺跡の生活圏を超えた土器流通を前提としていた可能性が生じる。このような土器生産体系の変革過程を模式化すると、まず下田II式において庄内式土器を主体に外来系土器II類から受容土器I類が形成される萌芽段階がある。さらに下田III式では、布留式土器組成を最終的に構成する器種が受容土器II類として受け入れられ、これに伴って弥生系の在来系土器I類が駆逐される。そして受容土器II類については、さらに恒常的な供給体制が整備され、古墳時代の新たな在来系土器として定着していくのである。

III式にみられる土器生産体系の変成の根源は、庄内式壺をはじめ庄内様式の成立に求められ、その生産と流通を通じて初期畿内政権に蓄積された経験が、おそらくは下田遺跡(群)におけるIII式の土器生産体制の前提として生かされている。これは下田遺跡独自の現象ではなく、畿内各地の拠点的集落を中心

に、ほぼ同時多発的な出現をみた形態であろう。しかし布留式土器の流通圏を想定した場合、庄内式慶の分布とは異なり、布留様式の地域浸透を主たる目的としたであろうことを仮説として提示しておく。

なお付言すれば、土器は他の有機質遺物と比較して遙かに遺存しやすいことから、いきおい出土遺物中で最も量的に目立つ存在となりがちである。しかし遺物として現存しないが、むしろ我々が実態を知り得ない手工業生産が行われていた可能性は高い。従って土器作りは、少なくとも集落内における手工業生産体制の一端を示すものであって、それが最も重要な手工業生産物であったとは断言できない。

さて、SD1108(3層)出土遺物の中では、土器と並んで木製品が量的・質的に大きな位置を占めており、下田遺跡における生活実態の一端を垣間みることができる。木製品の内容は豊富で、威儀具、武器から農具、建築部材まで多岐にわたり、土器からは得られない情報を補完する。木製品の調査に関しては、鍼などの未製品が存在することから、弥生時代以来の伝統工法を継承し、農具、工具、容器など生産用具、生活用具が集落内で自家生産されていた可能性が極めて高い。しかし全国的にも出土例が稀な蓋(衣笠)、環形付木製品(座尾?)、四方転びの箱、短甲など、特殊で非日常的な木製品の出自については、なお検討の余地があろう。蓋は1988年度に下田遺跡調査会が実施した調査で、多量の木製品、布留式土器と共に検出された笠骨の資料である。

蓋の実例としては笠骨部分のみの出土例が多い。大阪・兵庫・奈良・滋賀の各府県の他、群馬県・千葉県からも出土しており、少なくとも近畿から関東まで分布する。さらに蓋形埴輪の分布は九州まで広がることから、蓋自体は広い範囲に分布域をもっている。また蓋を装飾する立飾りの実例は、稀少ながら滋賀県守山市八ノ坪遺跡から出土している(吉田・稻垣1995)。

浅岡俊夫は木製蓋についての集成・分類を行い、幹に軸を受ける貫通孔(軸受け)のないI類、軸受けを有するII類、さらに正倉院伝世品をIII類とした(浅岡1990)。それぞれの帰属時期は、I類が弥生時代中期(畿内第二様式)から末葉、II類が古墳時代前期から中期に盛行し、またIII類は古墳時代末葉から奈良時代以後の型式で、律令制によって成立したとされる。すなわち蓋は弥生時代中期から奈良時代以降まで存続するが、時代と共に型式が変化する。下田遺跡の出土例はII類に属し、古墳時代前期以降の型式である。II類の特徴である軸受けは、華麗な立飾りを装着するための仕様で、弥生時代の蓋にはみられないが、蓋形埴輪では一般的な形態である。また浅岡はさらに踏み込んで、その生産地を未製品の出土例が多い奈良盆地中央南半部に求め、「笠縫邑」が分布していた可能性を説いた。そして前期～中期の大前方後円墳にみられる埴輪の世界観から、蓋・盾・鞍・鞆などの威儀具・儀仗具が「実際に首長権維持などの祭儀実修にあたって、蓋は貴人の行具として不可欠なもの」とし「権力の象徴である蓋の製作者は、はやくから権力者のもとに統括され、組織化されていた」と推定する。さらに蓋を使用できた階層は「大和政権の統一過程において、より政治的な身分秩序にかかりがったもの」と考えた。

また細川修平は滋賀県内の遺跡から出土した蓋を検討して見解を述べており(細川1992)、当時の蓋には大きさに格差があり、また天蓋の材質、色、装飾によって生じるバリエーションで身分や出自が示されると想定した。そしていずれも古墳時代前期に属し、形態的にも類似したもので、しかも「いずれも決して特殊ではない遺跡からの出土」であるため「一般的な集落群首長層に身分なりに応じた蓋をかざさせることによって、儀礼などをより象徴的にするという機能が考えられ」、「こうした機能を考え出したのは、儀礼や祭祀の頂点に立つ「畿内政権」にほかなら無い」とした。

浅岡の論考に従えば、蓋の形態は弥生時代から古墳時代にかけて立飾りをもつ型式(II類)に整備される。下田遺跡の出土例から、II類の型式は少なくとも下田III式、すなわち古墳時代前期古段階には誕生

していたことが確実である。このように蓋の形態が古墳時代に至って統合されたのは、蓋が新たな権力構造を象徴する役割を担わされることによって、弥生社会の産物から脱却を図る必要が生じたからである。蓋によって位階を表徴する機能は律令制下で整備されるが、その前駆形態は既に下田III式の段階において確立されたといえよう。従って、祭式や儀仗の場における蓋の顯示は集落の首長が独自に行い得る行為ではなく、律令時代まで連続と繼承された経緯からみても、その背景に初期畿内政権の存在を想定しないわけにはいかない。そしてこれらの蓋が、政権の主導のもとに大和で製作され、連合関係を構築した首長層に配布された可能性もまた高いのである。

蓋と同じく威儀具と考えられる環形付木製品は、滋賀県斗西遺跡S D02-3中層(植田1988)、奈良県戸石・辰巳前地区 S D-01下層(井上他1987)、大阪府久宝寺遺跡(八尾市立歴史民俗資料館編1992)等からの出土が知られる。環形付木製品は高度な技術で繊細・精巧に作られ、またいずれも形態が酷似するので、下田遺跡の外で製作されたものが持ち込まれた可能性も高い。その用途は未だ不明ながら、これを塵尾に比定する見解も提出されている(考察篇第3章)。いずれにせよ高度な木工技術が駆使された入念な作りで、さらに現状では少数例ではあるが畿内各地で点々と出土をみていることから、地域首長層などが保有し得た威儀具であったと考えられ、この点では蓋に類似した性格を有する。地域首長層は連合政権への帰属と引き換えに、一定の地域支配権を確保されたはずであり、威儀具はその象徴的機能を兼ね備えていたのであろう。従って蓋や環形付木製品などの威儀具を出土した遺跡は、その実態が不明な場合でも下田遺跡の事例から類推して、ほぼ同様な規模と性格をもつ遺跡であった可能性がある。下田遺跡からは他に木製短甲が出土しているが、少なくとも遺跡の状況からその背後に軍事的な緊張関係を読み取ることは困難で、むしろ軍事面での結束を意味する遺物として捉えられよう。

以上の状況を総合すれば、III式段階での下田遺跡は、通有の中大小集落と一線を画した性格をもち、一定の地域支配権を掌握した拠点的性格をもつ集落と見なし得る。この点ではII式までの集落構造と同様であるが、決定的な相違点は、その背後に初期畿内政権の存在をみるとある。初期畿内政権は下田II式併行期のある時点で成立し、より広域的な支配構造の確立を推進した。その結果、下田III式に至って伝統的な地方勢力が構造下に編み込まれていく構図が出現した。従って土器生産でも少し述べたが、下田遺跡と同様な状況が、畿内中枢を取り巻く周辺各地において拠点的に出現をみたことは想像に難くない。現状では類例に乏しいと言わざるを得ないが、この推論は下田III式と併行関係にある集落遺跡の分析によって、検証されて行かねばならない。

下田遺跡は、四ッ池・船尾西・石津の各遺跡と有機的関連をもつ下田遺跡群を構成しており、その中心に君臨する。これら遺跡群の立地は、石津川の下流域という点において看過できない側面をもつ。遺跡群の共同体構成員は水運にも長じていたはずで、下田遺跡 S D1108出土の木製權は、その一端を示す遺物といえる。石津川は和泉地域では最北端を流れる主要河川であり、その河口付近において和泉と他地域と海路で繋ぐ「津」すなわち港湾の存在した可能性は極めて高い。そして他地域との交流の拠点、あるいは防衛の砦として、石津川の港湾管理は下田遺跡群の伝統的かつ重要任務のひとつであったに違いない。また石津川に関しては、農耕のための河川管理や、水運活動が盛んに行われたはずである。和泉地域では他に、おそらく豊中遺跡群の集落も、大津川の港湾管理を通じて下田遺跡群と類似した性格を備えており、連合政権下において同等の在地首長としての地位を確保したであろう。

こうして下田遺跡の集落首長は、III式に至って連合政権体制に組み込まれることになったが、その政治社会での地位について検証したい。当时において政治的地位を端的に表徴する造形物は、前方後円墳

を最高位とする古墳である。大形前方後円墳の成立当初、畿内でもその分布域は奈良盆地を中心とする限定されたもので、その被葬者達はまさに中枢に位置し、初期畿内政権の樹立や維持に関与した人物に限られていた。和泉地域に所在する前期前方後円墳は、摩湯山古墳を最大として、黄金塚古墳、丸笠山古墳、貝吹山古墳、乳の岡古墳その他があるが、いずれも前期後半から末葉の造営になるもので、前半まで遡る古墳は一例もない。従って、Ⅲ式段階の下田遺跡と対応関係をもつ前期前方後円墳は皆無であり、また将来にわたって近傍地で埋没古墳が検出される可能性も極めて薄い。下田遺跡では七ノ坪遺跡と同様、前期段階でも伝統的な方形周溝墓に繋がる墓制がおそらく採用されており、これら和泉地域の二大勢力といえども、前方後円墳をはじめ古墳形式による造墓活動の実態はなかったのである。こうした古い墓制の採用は、もとより経済的条件によって生じたものではなく、古墳の造営が許されなかつた階層と解すべきであり、彼らが政権の中枢部に参与できない地位にあったことを示している。和泉地域全体を見渡しても、前期前半の段階では突出した首長墓の存在は認められず、政権の中枢に対して、いわば從属的な連合関係にあったといえよう。当時の政治社会における地位の序列関係は、初期畿内政権が誕生し、さらに既存の地方勢力が再構成される局面で、各首長層の勢力や貢献度に応じて設けられたのであろう。すなわち庄内式(併行)期における集落の動態が、少なくとも前期前半段階での集落首長層の政治的地位を、まずは規定したと換言することができよう。

第6節 まとめにかえて

一般に布留式前半で発展をみせた布留式土器が、後半には小形器台、有段口縁鉢の減少や、甕などの器種に型式学的な退潮傾向が表れる。その理由としては、小形器種による祭祀形態が崩壊し、土師器に対する価値観がおそらく一義的から二義的な位置へ後退したこと、さらに遅れて須恵器が出現し、土師器の日常化傾向に拍車をかけたことなどが考えられる。このような風潮に呼応して、下田Ⅲ式段階の下田遺跡で想定した土器生産体系も変質を遂げたはずであり、技術の一貫集落への浸透と共に普遍化が進み、調整は粗雑化して日常生活雑器としての様相がより強まっていく。

Ⅲ式を以て下田遺跡は調査地点から姿を消し、まとめた集落の形としては、遂に再び出現をみることはない。しかし古墳中期の畿内政権にとって、後に述べるように石津川流域は重要な土地であった。従って、その地を直接に掌握した下田遺跡が前期で衰退、消滅したとは見なし難く、少なくとも集落の移動によって、調査地点から見かけ上は消滅したのであろう。やや下流に位置する四ッ池遺跡の河道内からは前期後半の布留式土器が多量に出土しており(樋口・土山1984)、下田遺跡群は石津川下流域で大きな移動を伴うことなく存続したと推測される。また前項で想定したように、首長層の居住区が生産域と立地を異にする場合には、生産集団だけが何等かの理由で移動した可能性もある。そして下田遺跡群はⅢ式段階と同様に、やはり手工業・農業生産物の貢納、あるいは労働力の提供を通じて権力構造の一翼を担いながら政権との関係を温存させたはずである。こうした在地系首長勢力の存続は、豊中遺跡群内でも5世紀に出現する古池遺跡の存在から類推できる(豊中・古池遺跡調査会編1976)。古池遺跡は豊中遺跡の南方に位置し、河川状遺構から初期須恵器を伴う古式土師器や、数百点に及ぶ木製品が検出されている。木製品には農耕具、紡織具、建築材の他、刀形・劍形などの武器形木製品、黒漆塗りの素環頭刀劍把装具がある。下田遺跡より時代的に下るが、木製品の内容は豊富で似通っており、漆塗り素環頭把装具などは、5世紀における豊中遺跡群首長層の権勢の一端を窺わせる資料といえよう。

さて、およそ古墳時代中期を境として、下田遺跡が所在した石津川水系やその周辺の三国ヶ丘台地は、にわかに活況を帯びてくる。陶邑窯による須恵器生産の開始や、百舌鳥古墳群の造営といった畿内政権の主導による大規模な開発行為の幕開けである。このように石津川を中心とした下田遺跡の周辺一帯は、古代史上でも重要な画期となる生産域・墓域として、飛躍的な発展性を秘めていた。これらの開発に際しては、当然ながら在地の近傍集落から労働力の提供、および経済支援が要求されたに相違ない。そしていざれの地域も、まさに下田遺跡群の地域支配下にあることから、その内部では人的・物的の両面から支援体制が組織されたはずである。従って下田遺跡群の首長層による畿内政権への能動的な参画は、古墳時代中期にその端緒が求められる。

百舌鳥古墳群に属する乳の岡古墳は、長持形石棺の形態や石製腕飾類の存在から古墳群中でも最古の前期末の築造と考えられている。乳の岡古墳は百舌鳥古墳群の最も西南に位置し、四ッ池遺跡や石津遺跡と近接した低い段丘上に立地することから、畿内政権との緊密な関係を構築した在地首長の墳墓との見解も提出されている(石部1979)。一方、信太山丘陵の先端に位置する和泉黄金塚は、やはり在地首長の墳墓と考えられるが、この地域は石津川と異なる水系に属し、直ちに下田遺跡群と関連づけることはできない。従って現状では、乳の岡古墳が下田遺跡群との関連性を想定できる唯一の古墳であり、その築造は石津川流域における開発の嚆矢を告げる記念碑的事業であったといえよう。

一方、石津川流域での開発が活性化する直前、和泉中部域にあたる岸和田市内において、前期後半に屈指の大形前方後円墳である摩湯山古墳が造営されている。摩湯山古墳は松尾川と牛滝川に挟まれた丘陵先端に位置する。その周辺では前期後半の大規模な集落は発見されていないが、摩湯山古墳に近接した三田遺跡では165基に及ぶ前期後半の土墳墓群が検出されており(渡辺・小山田・宮崎編1987), 古墳の近傍にかなりの規模を誇る同時期の集落が存在したことを示唆する。古墳時代前期の和泉地域では、下田遺跡群、豊中遺跡群が弥生時代以来の勢力を基礎として発展しただけではなく、これらと異系統の首長系列が小地域ごとに成長し、畿内政権中枢との交渉を通じてその地位を確保していった状況が窺える。そして摩湯山古墳の出現は、従属性的な連合関係で結ばれた和泉の旧勢力を圧するように、さらに中枢との緊密な政治的関係を構築するに至った、大首長の誕生を物語るものであった。

謝辞

小稿を草するにあたっては、浅岡俊夫・池峯龍彦・大野 薫・岡戸哲紀・奥田 尚・岸本道昭・小林義孝・駒井正明・酒井龍一・坂口昌男・次山 淳・土井孝之・橋本高明・橋口吉文・藤田和尊・藤田憲司・古川久雄・山田隆一・山元 建・米田敏幸の各氏、並びに庄内式土器研究会の参加者各位より有益な御教示・御指導を得た。

また坪井清足先生には不穏な申し出にも関わらず、小若江北遺跡出土の古式土器の再実測を快諾頂き、実務面では近畿大学総務課の方々に格別の配慮を頂いた。上町遺跡出土土器の実測にあたっては、石神 怡・灰掛 薫・白石耕治・乾 哲也各氏のご協力を賜った。さらに森岡秀人氏には、編年にあたって高杯を基準とする視点など重要な指摘を少なからず頂戴し、阪神大震災直後の常勤を逸した過密スケジュールの最中に、貴重な時間を割いてご指導を賜った。

以上の方々の学恩に対し、末筆ながらここに記して厚く御礼申しあげます。

(1996年12月)

文献

- 赤塚次郎 (1990) 「V考察」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 浅岡俊夫 (1990) 「きぬがさの検討—出土木製笠骨をとおして—」『今里幾次先生古希記念 摂磨考古学論集』
- 安達厚三 (1969) 「古墳時代溝出土の遺物」『昭和43年度平城宮発掘調査概報』奈良国立文化財研究所年報1969
- 安達厚三・木下正史 (1974) 「飛鳥地城出土の古式土器」『考古学雑誌』第60号 第2巻
- 阿部綱嗣 (1985) 「土器の移動についての一考察—庄内式土器を中心として—」『財団法人東大阪市文化財協会紀要』I
〔附〕東大阪市文化財協会
- 池峯龍彦 (1995) 「鶴田町遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第51冊 堀市教育委員会
- 石井清司 (1989) 「丹後・丹波地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編 木耳社
- 石神 怡・鈴木陽一 (1978) 「古池北遺跡の調査」『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 石附喜三男 (1966) 「惣の池集落遺跡」『信山遺跡調査概報』信山遺跡調査団
- 伊藤宏幸 (1993) 「舟木遺跡」『塩塚遺跡I(津名郡)』兵庫県生産遺跡調査報告第2冊 兵庫県教育委員会
- 石野博信 (1976) 「縄折」「難向」桜井市教育委員会
- 石野博信 (1990) 「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
- 石野博信・関川尚功 (1976) 「難向」桜井市教育委員会
- 石部正志 (1977) 「原始古代集落の変遷—泉北平野ー」『地方史と考古学』地方史マニュアル9 柏書房
- 石部正志 (1979) 「考古編」『岸和田市史』第1巻
- 一瀬和夫 (1988) 「久宝寺・加美遺跡の古式土器」『八尾市文化財紀要』3 八尾市教育委員会
- 井藤 徹 (1974) 「古池北遺跡調査概要」大阪府文化財調査概要1973 大阪府教育委員会
- 井上和人 (1980) 「第V章2 土器」『平城宮発掘調査報告』X 奈良国立文化財研究所学報第39冊 奈良国立文化財研究所
- 井上直樹 (1989) 「東奈良遺跡(88-2) I-4-B・C・F・G地区」『昭和63年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
- 井上義光・他 (1987) 「宇陀地方の測量調査(大和高原ハイパイロット事業地内の発掘調査概要)―昭和60年度―」
〔奈良県遺跡調査概報1985年度〕奈良県教育委員会
- 植田文雄 (1988) 「能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集—斗西遺跡—」能登川町教育委員会
- 植田文雄 (1994) 「古墳時代土器論—近江の土器、その変遷と画期一」『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会
- 宇田川誠一 (1959) 「羽衣砂丘遺跡調査報告—大阪湾沿岸の古代漁村集落の一資料—」高石町史資料第1輯 高石町公民館
- 大阪府立花園高校地盤部編 (1970) 「北島池遺跡」『河内古代遺跡の研究』
- 大阪府埋蔵文化財協会編 (1986) 「脇浜遺跡発掘調査報告書」〔附〕大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第6輯 〔附〕大阪府埋蔵文化財協会
- 大阪文化財センター編 (1979) 「池上遺跡」第二分冊 土器編
- 大阪文化財センター編 (1992) 「小阪遺跡」大阪府教育委員会・〔附〕大阪文化財センター
- 大野 黒 (1983) 「萱振遺跡出土の古式土器について」『萱振遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 岡野慶隆・祭本敦士 (1989) 「川西市栄根遺跡—第19次発掘調査報告—」川西市遺跡調査会
- 岡本欣子 (1985) 「手培形土器考」『兵庫史の研究』松岡秀夫牟寿記念論文集
- 置田雅昭 (1982) 「古墳出現期の土器」『えとのす』第19号 新日本教育図書株式会社
- 甲斐忠彦 (1980) 「後期弥生土器の細別」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告III—藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査—」
奈良国立文化財研究所学報 第37冊
- 堅田 直 (1965) 「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」岸和田市教育委員会・〔附〕古代学協会
- 觀音寺山調査会編 (1969) 「和泉觀音寺山弥生式遺跡発掘調査概要」『ヒストリア』52 大阪歴史学会
- 岸本道昭 (1996) 「西播磨の庄内式前後」『庄内式土器研究』II 庄内式土器研究会
- 岸本道昭・岡戸哲紀編 (1990) 「陶邑・伏尾遺跡A地区」〔附〕大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯 大阪府教育委員会・
〔附〕大阪府埋蔵文化財協会
- 岸本道昭・古本 寛 (1995) 「尾崎遺跡II」電竈市文化財調査報告14 竈野市教育委員会
- 岸和田遺跡調査会編 (1975a) 「土生遺跡第2次発掘調査概要」
- 岸和田遺跡調査会編 (1975b) 「土生遺跡第3次発掘調査概要」
- 北野俊明 (1977) 「昭和51年度四ヶ池遺跡調査概要—方形周溝墓の調査—」堺市埋蔵文化財研究会
- 久米雅雄 (1985) 「和氣遺跡発掘調査概要報告書」大阪府教育委員会
- 小林行雄 (1984) 「小型丸底土器小考」『考古学』6-1
- 小林行雄 (1958) 「弥生式土器集成」資料編
- 鈴井正明 (1993) 「上フジ遺跡・三田古墳」〔附〕大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第80輯 〔附〕大阪府埋蔵文化財協会

- 近藤利山（1977）『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要2 岸和田市教育委員会
- 近藤利由・尾谷雅彦・酒井龍一（1976）『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要I 岸和田市教育委員会
- 近藤利由・土師春樹（1978）『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要3 岸和田市教育委員会
- 近藤義郎（1977）『古墳以前の埴丘墓』『岡山大学法文学部学術紀要』第37号
- 酒井龍一（1975）『和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について－認識論的作業仮説として－』『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会
- 酒井龍一（1976）『和泉に於ける「伝統的第V様式」に関する覚え書－豊中遺跡出土遺物の整理をして－』『豊中・古池遺跡発掘調査概要そのIII』豊中・古池遺跡調査会
- 酒井龍一（1977）『古墳造営労働の出現と煮沸用甕一造営キャップの検証にむけて－』『考古学研究』第24卷第2号 考古学研究会
- 坂口昌男（1976）『東雲遺跡発掘調査概要』泉大津市教育委員会
- 坂口昌男・貴志正則・楠山享司（1982）『七ノ坪遺跡発掘調査概要II』泉大津市文化財調査概要7 泉大津市教育委員会
- 坂口昌男・佐藤正則・楠山享司（1981）『古池遺跡発掘調査概要I』泉大津市文化財調査概要6 泉大津市教育委員会
- 坂口昌男・原島麻美・橋本富恵（1990）『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概要8』泉大津市文化財調査報告20 泉大津市教育委員会
- 阪田育功（1984）『河内における布留式土器の一様相』『佐堂（その2）－I』助大阪文化財センター
- 渋谷高秀（1985）『第4章 出土遺物の考察』『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会
- 下田遺跡調査団編（1990）『下田遺跡発掘調査概要 しもだ』
- 白石耕治（1996）『上町遺跡第1・2次調査の遺物について』『上町遺跡発掘調査報告書』和泉市埋蔵文化財調査報告第3集 和泉市教育委員会
- 末永雅雄・小林行雄・中村春樹（1988）『太和に於ける土師住居跡の新例』『考古学』第9卷10号
- 鈴木陽一（1982）『湊遺跡発掘調査報告書』泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告I 泉佐野市教育委員会
- 鈴木陽一（1992）『和泉における古式土器の様相』『小阪遺跡』大阪府教育委員会・助大阪文化財センター
- 鈴木陽一（1993）『脚台式製塙土器について－湊遺跡出土の製塙土器からみて－』『湊遺跡－90-4区の調査－』泉佐野市文化財発掘調査報告27 泉佐野市教育委員会
- 須藤 隆・吉田恵二・土肥 孝・井上和人（1980）『第4章 1土器』『平城宮発掘調査報告』X 奈良国立文化財研究所学報第39冊 奈良国立文化財研究所
- 関川尚功（1976）『纏向遺跡の古式土器』『纏向』桜井市教育委員会
- 関川尚功（1988）『古墳時代の土器の変遷』『季刊考古学』第24号 雄山閣
- 高島 敏・松村隆文（1985）『府中遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 田中 琢（1965）『布留式以前』『考古学研究』第12卷第2号 考古学研究会
- 都出比呂志（1974）『古墳出現前夜の集団関係』『考古学研究』第20卷第4号 考古学研究会
- 都出比呂志（1979）『前方後円墳出現期の社会』『考古学研究』第26卷第3号 考古学研究会
- 都出比呂志（1989）『第四章 地域團と交易圈』『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 坪井清足（1956）『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』笠岡市教育委員会
- 坪之内徹（1992）『和泉南部・紀ノ川北岸地域における古墳時代初頭の土器様相－熊取町大久保遺跡出土土器を中心として－』『庄内式土器研究』I 庄内式土器研究会
- 坪之内徹（1996）『大久保遺跡出土古墳時代初頭の土器について』『熊取町史紀要』第3号 熊取町教育委員会
- 寺沢 薫（1986）『畿内古式土器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県立橿原考古学研究所
- 寺沢 薫（1995）『箸墓古墳』『前期前方後円墳の再検討』第38回埋蔵文化財研究集会発表要旨 埋蔵文化財研究会
- 土山健史（1993）『昭和池遺跡発掘調査概要報告』『堺市文化財調査概要報告』第41冊 堀市教育委員会
- 豊中・古池遺跡調査会編（1976）『豊中・古池遺跡発掘調査概要そのIII』
- 中井貞夫・井藤 徹（1974）『七ノ坪遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要1973-7 大阪府教育委員会
- 中川寿代（1991）『石川下流域の布留式土器』『西浦銅鐸』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書24 羽曳野市教育委員会
- 西口陽一（1994）『野々井西遺跡・O-N231号窯跡』『助大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第36号』大阪府教育委員会・助大阪府埋蔵文化財協会
- 西村 歩（1995）『和泉地域北部における庄内式併行期の土器様相（予察）－堺市下田遺跡の調査成果より－』『庄内式土器研究』IX 庄内式土器研究会
- 灰沢 薫・酒井龍一（1975）『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会

- 灰掛 薫 (1978)『府中遺跡発掘調査概要・II』和泉市教育委員会
- 橋本高明 (1988)『第IV章 まとめ』『西大路遺跡発掘調査報告書』附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第23輯 附大阪府埋蔵文化財協会
- 橋本高明・岡戸哲紀・岡本武司編(1988)『西大路遺跡発掘調査報告書』附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第23輯 附大阪府埋蔵文化財協会
- 原口正三 (1968)「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高校研究紀要』3
- 橋口吉文 (1978)『S G-001井戸、及び S K-006土坑出土の土器について』『船尾西遺跡発掘調査報告書』堺市教育委員会
- 橋口吉文 (1992)「和泉における庄内並行期の土器について」『庄内式土器研究』I 庄内式土器研究会
- 橋口吉文・土山健史(1984)『四ヶ池遺跡—第83地区発掘調査報告書—』堺市文化財調査報告書第16集 堀市教育委員会
- 比田井克仁(1985)「弥生時代高杯考—南関東地方を理解するために—」『古代探求II—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—』早稲田大学
- 広瀬和雄 (1978)「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 広瀬和雄 (1994)『第三部 近畿～東海 6 大阪府』『日本土器製造研究』青木書店
- 細川修平 (1992)「蓋形木製品について」『松原内湖遺跡発掘調査報告書II』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 前川浩一 (1989)「名越西遺跡発掘調査概要」貝塚市埋蔵文化財調査報告第17集 貝塚市教育委員会
- 前田敬彦 (1990)「皿形高杯の分析」『山口遺跡第5次発掘調査報告書』和歌山市教育委員会
- 松下 勝 (1980)「淡路の土器」「播磨をめぐる弥生文化」(1993)所収 「松下勝著作集」刊行会
- 村川行弘 (1958)「近畿大学構内・長瀬遺跡出土の遺物」『近畿大学周辺 古始時代編』近畿大学商経学会研究叢書第二輯
- 村川行弘・他(1980)「河内大竹遺跡発掘調査報告書」『大阪経済法科大学考古学研究報告』第5集 八尾市教育委員会・大阪経済法科大学考古学研究室内大竹遺跡発掘調査団
- 森 浩一・田中英夫(1954)「堺市浜寺石津町遺跡概報」『古代学研究』第9号 古代学研究会
- 森 浩一・田中英夫(1961)「堺市浜寺石津町遺跡の土器と須恵器」『古代学研究』第28号 古代学研究会
- 森岡秀人 (1977)「畿内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『河内長野大師山一大師山古墳・大師山遺跡発掘調査報告書—』関西大学文学部考古学研究 第5冊 関西大学
- 森岡秀人 (1985)「土器の交流—西日本—」『月刊考古学ジャーナル』No.252 ニュー・サイエンス社
- 森岡秀人 (1990)「山城地域」「弥生土器の様式と編年」『近畿編II』木耳社
- 森岡秀人 (1991)「土器の移動 1西日本」「土器と須恵器」古墳時代の研究6 雄山閣
- 森岡秀人 (1993)「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4号 第8回東海埋蔵文化財研究会 論考篇
- 森村龍一・井宏幸編(1989)「陶邑・大庭寺遺跡」附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第41輯 大阪府教育委員会・附大阪府埋蔵文化財協会
- 八尾市立歴史民俗資料館編(1992)『特別記念展 八尾を掘る—10年の歩み—』
- 安村俊史 (1994)『第3章 I区の調査』『船橋遺跡』柏原市文化財概報 1993-VI 柏原市教育委員会
- 山内紀嗣 (1994)「製塙土器の新例」『天理参考館報』第7号 天理大学
- 山田隆一 (1995)「近畿3(大阪府)」「ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—」第37回埋蔵文化財研究集会発表要旨埋蔵文化財研究会
- 横山浩一 (1959)「手工業生産の発展—土器部・須恵器」『日本 古墳時代』世界考古学大系3 平凡社
- 吉田秀則・稻垣正宏(1995)「蓋とその立ち飾り」「祭と政—古墳時代のまつりのかたち—」滋賀県立安土城考古博物館
- 米田敏幸 (1981)「古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
- 米田敏幸 (1983)「成法寺遺跡における庄内式成立期の土器の様相」「成法寺遺跡」附八尾市文化財調査研究会
- 米田敏幸 (1990)「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集』III 考古学を学ぶ会
- 米田敏幸 (1991)「土器の編年 1近畿」「土器と須恵器」古墳時代の研究6 雄山閣
- 米田敏幸 (1992)「庄内播磨型壺の提唱」「庄内式土器研究III」庄内式土器研究会
- 米田敏幸 (1994)「河内における庄内式土器の編年」「庄内式土器研究VII」庄内式土器研究会
- 渡辺昌宏・小山田宏一・宮崎泰史編(1987)『三田遺跡発掘調査報告書』附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第15輯 附大阪府埋蔵文化財協会
- 渡辺昌宏・森井貞夫・虎間英喜(1988)『第III章第3節 弥生時代』『山ノ内遺跡発掘調査報告書』附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第34輯 附大阪府埋蔵文化財協会